

2012年度卒業論文

郷土愛からはじまる観光まちづくり
～蔵のまち・会津喜多方市を事例として
地域における観光まちづくりの意義を考察する～

主査 浦野正樹 教授

早稲田大学文化構想学部文化構想学科
社会構築論系4年浦野ゼミナール
田中千晶(1T080590-1)

目次

1章：はじめに	5
1-1. 問題意識	5
1-2. 研究目的	5
1-3. 研究方法	6
1-4. 論文構成	6
2章：新しい観光と観光まちづくり	7
2-1. 新しい観光	7
2-2. 手段としての新しい観光	8
2-3. 「観光—地域づくり循環」	8
2-4. 「観光—地域づくり循環」を生み出す技術	9
3章：福島県喜多方の地域概要	10
3-1. 地理	10
3-2. 歴史	10
3-3. 沿革	10
3-4. 人口	10
3-5. 産業	11
3-6. 交通	12
3-7. 喜多方の中心市街地問題と蔵の保全運動と観光	13
4章：喜多方の観光まちづくりの歴史	15
4-1. 歴史	15
4-2. 蔵のまち	17
4-2-1. 喜多方の蔵の歴史	17
4-2-2. 喜多方の蔵の特徴	17
4-2-3. 喜多方蔵のまち観光の起源	18

4-2-4. 蔵の保全運動	18
4-3. ラーメンのまち	21
4-3-1. 喜多方ラーメンの歴史	21
4-3-2. 喜多方ラーメンの特徴	21
4-3-3. 喜多方ラーメン観光の起源	22
4-3-4. 蔵のまち喜多方老麺会(くらのまちらーめんかい)	22
4-3-5. 市民の生活に根差した喜多方ラーメン	23
5章：喜多方のまちづくり活動	24
5-1. 2000年代の喜多方のまちづくり活動	24
5-1-1. 東京大学都市デザイン研究室	24
5-1-2. 福島県あいづデスティネーションキャンペーン	26
5-1-3. 喜多方の元気再生プロジェクト「日本一の蔵再生によるまちおこし」	28
5-2. 喜多方における「観光—地域づくり循環」の形成	32
5-2-1. 地域づくりの技術①地域づくり型観光事業者～喜多方の場合～ ...	33
5-2-2. 地域づくりの技術②地域連携の場づくり～喜多方の場合～	34
5-2-3. 集客の技術～喜多方の場合～	34
5-2-4. 「観光—地域づくり循環」の前提となる観光資源～ラーメンの役割～	35
6章：観光まちづくりを成功に導いた喜多方の土地柄	37
6-1. まちの規模	37
6-2. 商人のまち・喜多方	38
6-3. まちづくりにつながる郷土愛	39
7章：観光まちづくりが地域に与える影響	40
7-1. 喜多方における観光まちづくりの意義	40
7-2. 観光まちづくりが地域社会に与える影響	41

終章：まとめ	42
8－1. 論文の構成	42
8－2. 本論文の意義	43
8－3. 謝辞	43
【参考資料】	44

1章：はじめに

1-1. 問題意識

少子高齢化による人口減少、産業の転換、そして過疎化などの社会情勢により、多くの地方が衰退してきている。したがって、このような閉鎖的な状況を打開するために、近年、「観光」による地域振興を成し遂げようとする地域が多い。そして現在、全国の多くの地域が、地域主導で地域資源を効果的に活かしたものを観光資源として、観光客に提供している。このような取り組みは観光まちづくりと呼ばれ、現在全国各地でブームのように行われている。しかし、観光まちづくりはその地域の特性を活かすことが前提としてあるため、多様な広がりを見せており、一様に把握できるものではないけれども、私はこの一種のブームとなっている観光まちづくりの実情を知りたいと思った。そこで私は、比較的古くから観光まちづくりが開始され、約40年間訪れる観光客数が増え続けている福島県・喜多方市を成功事例として、現在流行の観光まちづくりの実情を探っていきたいと考えた。喜多方は、1970年代から蔵のまちとして観光客が訪れるようになり、その後ラーメンのまちとしても有名となり、現在では年間150万人以上¹の観光客が訪れる観光都市である。

しかし、喜多方のことを調べ、さらに現地まで行ってみると、普通のいわゆる誰もが知っている観光地とは違う雰囲気を感じた。ここでいう誰もが言う観光地とは、観光客向けの観光施設が多くあり、その土地のお土産をたくさん売っているお土産物屋さんが軒を連ねているような場所である。しかし、喜多方はそうではない。人々を引き寄せる観光資源としての蔵も、普段は実際に店蔵や酒蔵として使用されている生活の中の蔵であり、そのような店舗の一部にお土産を売るコーナーが設置されてはいるものの、それはお土産だけ売るための店舗ではない。つまり、喜多方は観光地として有名であるにもかかわらず、観光客だけを対象とした商売だけで生活を営んでいる人は少ないのである。これは、観光振興を行ったところで、直接的な恩恵を受ける人が少ないことを意味しているが、それならばなぜ喜多方の人々は観光まちづくりに積極的に取り組んでいるのだろうか。それはきっと観光まちづくりというものが地域に及ぼす影響は、経済効果だけではないからであると推測できる。また、目的が経済効果だけではないなら、人々をまちづくりに参加させる動機とは一体何なのだろうかと考えた。そしてインタビュー調査をした結果、その答えとして郷土愛というものが浮かび上がってきた。

1-2. 研究目的

約40年前までは、モータリゼーションなどの社会現象の影響で中心市街地が衰退していき、観光客などが来るようなまちではなかった喜多方だが、現在では年間150万人以上の観光客が訪れている。何をもって観光まちづくりの成功とするかは、難しい問題ではあるが、単純に観光客数が増加してきたという点から、私は喜多方を成功事例とし、なぜ

¹ 喜多方市HPより

喜多方の観光まちづくりが成功したのかを分析したい。

また、市民が観光まちづくりに参加する動機を明らかにするとともに、観光まちづくりが地域社会に与える影響について考察していく。

つまり、本論文の研究目的は以下の3点である。

- ① 喜多方の観光まちづくりが成功した要因
- ② 市民が観光まちづくりに参加する動機
- ③ 観光まちづくりが経済効果以外に地域に与える影響

1-3. 研究方法

まず文献調査などで、喜多方のまちづくりの歴史を紹介した後、大沢健の『観光革命』²という文献を参考として、①喜多方の観光まちづくりが成功した要因について考察していく。この文献の中の考え方は2章で詳しく述べるが、大まかに述べるとニューツーリズム(新しい観光)には、「観光—地域づくり循環」が必要であるというものである³。

次に、喜多方でのインタビュー調査から②喜多方の市民がまちづくりに参加する動機を喜多方という土地柄を踏まえて明らかにしていく。

そして最後に、喜多方の観光まちづくりの事例から、③観光まちづくりが地域社会に与える影響について考察する。

1-4. 論文構成

本論文は先述した①～③を研究目的とし、それぞれを明らかにし論じていく。この1章では、本論文の目的について述べた。次の2章では、観光まちづくりが盛んになった社会情勢と「新しい観光」について述べていく。3章では、今回の調査対象地域である福島県喜多方市の地域概要を説明する。「新しい観光」に地域特有の観光資源があることは絶対条件であるが、4章では、喜多方の観光資源である蔵とラーメンについて紹介する。5章では、参考文献をもとに、「観光—地域づくり循環」という考え方から研究目的①喜多方の観光まちづくりが成功した要因を分析していく。6章では、ヒアリング調査をもとに、研究目的②市民がまちづくりに参加する動機として、喜多方の郷土愛について考えたい。7章では、喜多方のまちづくりが地域社会に与えている影響から、研究目的③地域における観光まちづくりの意義を考察する。終章では、章全体の論文のフロー図を交えて、最後にもう一度本論文の構成を述べ、そして本論文の意義を書いていく。

²大沢健『観光革命 体験型・まちづくり・着地型の視点』角川学芸出版、2010年

³『観光革命』P73

2章：新しい観光と観光まちづくり

この章では、観光まちづくりが誕生した社会的背景を踏まえ、先行研究を用いて、新しい観光の意味とその方法について論じる。

2-1. 新しい観光

主に第一次産業と第二次産業を担っていた地方経済は、産業構造の転換に伴い、次第に疲弊していった。そこで、そのような地域が、地域経済を支える新たな基幹産業として注目したのが、観光であった。そして、観光を地域の新たな基幹産業にすべく、地方は企業を誘致し、その結果、企業の資金によって、地方では観光のための大規模な開発が進められ、多くのハコモノが作られていった。特に1980年代後半のバブル経済期には、政府の支援もあり、全国でリゾート開発が行われ、「リゾートブーム」という現象が起こった。しかし、このリゾートブームはバブル経済崩壊とともに終焉を迎えることとなる。バブル経済崩壊後、地方のリゾート開発は破綻し、すでに作られたハコモノである観光施設の維持は、決して財政に余裕があるとは言えない地方自治体にとって、負担となっていった。

このような外からの大規模なリゾート開発の失敗を受けて、地域資源を活用した地域主体の「新しい観光」が着目され始めた。この「新しい観光」とは、明確な定義はないが、『『ありのままの地域資源』を見つめ直し、従来は観光用とは考えられなかった新しいネタを活用して、体験型・交流型の観光を開発すること』⁴である。つまり、「新しい観光」では、地域に以前からある資源を活用しているので、リゾート開発時に必要とされた多額の初期費用を伴う施設などは必要ない。このような観光の変化は、2006(平成18)年に1963年の観光基本法を改正して作成された「観光立国推進基本法」⁵からも感じ取ることができる。また、このような変化の背景として、観光を仕掛ける側の変化だけではなく、観光客のニーズの変化も大きく影響している。誰でも観光に行くことができる現代において、今までの名所だけを巡り、大規模な土産物屋を訪れるありきたりな観光では、人々は満足できなくなってきている。現代の観光客は、より地域らしさにこだわりをもち、地域に暮らし、働く人々との交わりを求め、住民のみが知る地域の魅力に触れるなど、これまでのツアーでは体験できなかった、より深い地域を知り、体験する観光を求め始めている。つまり、「自分の土地にはない、いい食やいい酒、いい街並み、いい建物、いい『文化』を味わい楽しみたい」⁶のである。さらに、旅行形態も、一般的にマス・ツーリズムと呼ばれる旅行代理店が企画する団体旅行から、個人で旅行をアレンジできる個人・グループ旅行に変化しており、このことも「新しい観光」を促進させている一つの要因であると考えら

⁴ 『観光革命』、P3

⁵ 2007年に施行された観光基本法を全面改正した法律。

⁶ 木村尚三郎「21世紀は観光の時代」『グローバル観光戦略』(日本都市センター、2005)、P4

れる。

2-2. 手段としての新しい観光

これまでの観光は、経済効果という目的から「より大量に、よりはやく、より安定的に」効率性・収益性を最大限に考え行われてきたが、「より少数の顧客に、よりゆっくりと、特別なものを」提供する新しい観光は、これまでの観光のように収益を得ることは難しいため、観光振興を行い始めた地域の中には、新しい観光に対して困惑と失望を抱きはじめる地域も少なくない。⁷しかし、大澤は「新しい観光の根底にあるのは、観光の意味の変化なのである。この新しい意味を出発点として明確に設定しておかないと、新しい観光は取組む意義も、効果もほとんどないものになってしまう」⁸と言う。この大澤の言う新しい観光の新しい意味というのは、「地域の魅力を保全・発展させるような地域づくりこそが『目的』で、観光はそのための『手段』なのだ」⁹というものだ。つまり、以前は観光が『目的』であり、地域づくりはそのための『手段』であるという『観光のための地域づくり』と考えられていたが、実は新しい観光の意味とは、『地域づくりのための観光』だと言うのである。このことから、既存の考え方では、新しい観光を上手に運営することができないということが分かる。

2-3. 「観光—地域づくり循環」

しかし、新しい観光の目的は地域づくりにあると言っても、収益につながらなければ持続可能なものになりえないと大澤は指摘する。「観光によって地域の魅力が向上し、地域の魅力の向上が観光業の収益につながる、という双方向の循環的な関係を作り出すこと、こうした『観光—地域づくり循環』が『新しいDestination』のあり方であり、ニューツーリズムが提起するエッセンスであると言える」¹⁰。収益のない観光では、持続可能な活動にはなりえない。だから、この双方向の循環を行うことで、地域にとっても、地域の観光にとっても良い持続可能な『地域づくりのための観光』を行うことができるのである。

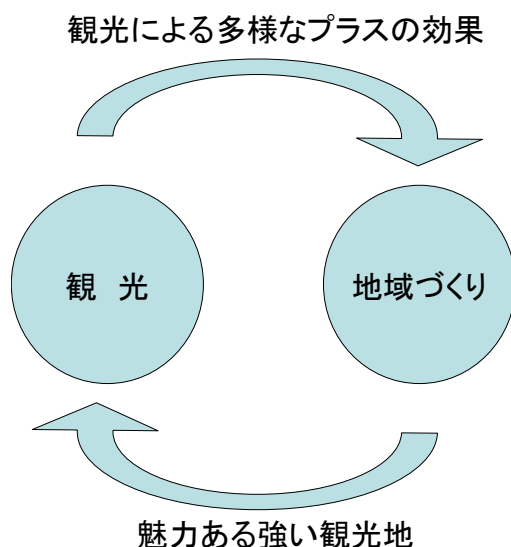
⁷ 『観光革命』第2章

⁸ 同上 P73

⁹ 同上 P74

¹⁰ 同上 P77

図1) ニューツーリズムの理念「観光—地域づくり循環」(出典:『観光革命』)



2-4. 「観光—地域づくり循環」を生み出す技術

さて、新しい観光の構造はわかったが、どのようにこれを行っていけばいいのだろうか。大澤は、観光—地域づくり循環を生み出すには2つの技術が必要だと述べる。一つは、「地域づくりの技術」であり、もう一つは「集客の技術」である。

まず「地域づくりの技術」から見ていこう。「地域づくりの技術」とは、地域の側に立つ『地域づくり型観光事業者』を地域に多く育成し、さらに「地域づくりのための観光」という考えを持った事業者が地域全体の魅力が向上するように相互連携を作り出していくことである。つまり、積極的なアクターと、そのアクターを結びつける連携を形成する必要があるということである。

次に、「集客の技術」である。観光—地域づくり循環を生み出し、観光まちづくりに持続性を持たせるためには、収益の存在も重要である事は先にも述べた。これまでの観光では、集客の方法は旅行会社が担っていたが、利益最大主義の旅行会社にとって、収益性の低い新しい観光に対して関心が薄いということは当然であるが、実際、少数の観光客を不定期に送客するビジネスモデルを旅行会社が持っていないという現実もある。そのため、現地の視点で現地に合った集客方法を発信する「着地型の集客方法」が新しい観光の集客の技術として注目されている。この着地型の集客方法としては、旅行会社と連携して行う方法や、インターネットなどを使い現地から直接集客する方法、そして観光施設などと提携して行うような現地同士が連携し集客する方法などがある。

3章：福島県喜多方の地域概要

3章では、喜多方の資料などをもとに、この論文の事例となる福島県喜多方市の人口や歴史などの地域特性を紹介し、最後に喜多方の観光の始まりについて触れる。

3-1. 地理

喜多方市は福島県北西部、会津盆地の北部に位置し、554.67Km²の土地を有している。その土地の全体の全体の68.9%は林野であり、北は飯豊連峰、東は磐梯山に隣接する雄国山麓があり、山に囲まれた土地である。市の中央には一級河川である田付川が流れており、川の西側に位置する小荒井と東側の小田付が、喜多方市街地の中心である。そして、この市街地を囲むようにして、農業地帯が周辺に広がっている。

3-2. 歴史

喜多方は田付川を挟んで、小荒井、小田付という二つの中心地区を持っているが、これは中世末期に芦名氏の命によって、行われた町立てを契機としている。江戸時代は会津藩の領地であり、会津の北部に位置していたことから、北方(きたかた)と呼ばれていた。当時、会津若松と山形県米沢を結ぶ街道が通っていたため、物資の集散地としてこの地は栄えた。同じ会津の中でも、鶴ヶ城のある会津若松は、武士の集まる城下町であり、一方、喜多方は農民と商人の集まる在郷町という性格を持っていた。

そのように、商人のまちとしての性格を持つ喜多方では、この土地で古くからの家業を受け継いでいる旦那衆の存在が今でも大きい。ほとんどの旦那衆と呼ばれる方は、まちの中心部に大きな蔵を持っており、また、その蔵を活用して仕事をしている人もいる。旦那衆には、伝統産業である酒や味噌などを作る醸造業の方も多いが、商店を営んでいらっしゃる方も多い。古くからの家業を受け継いでいるとは述べたが、彼らが保守的な商売を行っているというわけではない。ある旦那さんが「喜多方の商人の歴史は、日本の産業の移り変わりと一緒に」と言われるように、喜多方の商人は時代の変化によって、常に新たな商売の機会を模索し、時には商売自体を変えるなど、柔軟で、なおかつ強かな商売を行っている¹¹。このように産業転換に喜多方の商人たちが対応できた理由の一つは、自然に恵まれている喜多方には、地域資源が豊富にあるからだ。

3-3. 沿革

明治以降、この土地では、小さな集落を合わせて町や村が作られていた。

そして、1875(明治8)年8月、町村合併法により、小荒井村、清次袋村、小田付村、塚原村、稲村村の5村が合併し、喜多方町が発足した。当時の喜多方町の人口は、約4000人であった。

¹¹ 酒屋を継いだある旦那さんは、現在はコンビニエンスストアも経営している。

また、1954(昭和29)年3月、喜多方町、松山村、上三宮村、岩月村、関柴村、熊倉村、慶徳村、豊川村の1町7村が合併し、喜多方市が誕生した。

そして、2006(平成18)年1月、喜多方市、熱塩加納村、塩川町、山都町、高郷村の5市町村が合併し、現在に至る新しい喜多方市が発足した。

3-4. 人口

喜多方市の人口は、昭和30年頃をピークとして、その後は減少傾向にある。現在は、人口減少のうち、約3分の2が自然減少であり、残りの3分の1が社会減少という内訳になっている。図2は戦後の旧喜多方市内の人口の推移をグラフにしたものであり、図3は2006(平成18)年に合併した地域を含んだ新喜多方市の戦後の人口推移を表したグラフである。

図2) 旧喜多方市の戦後人口推移(参照：国勢調査)

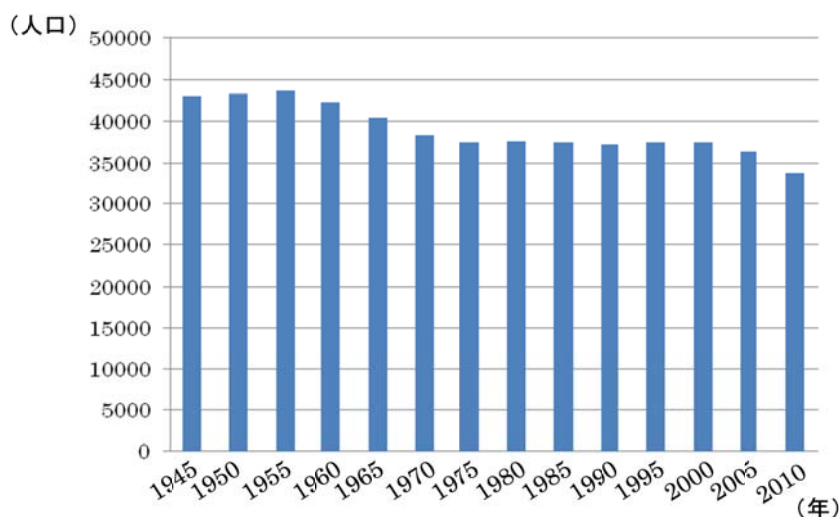
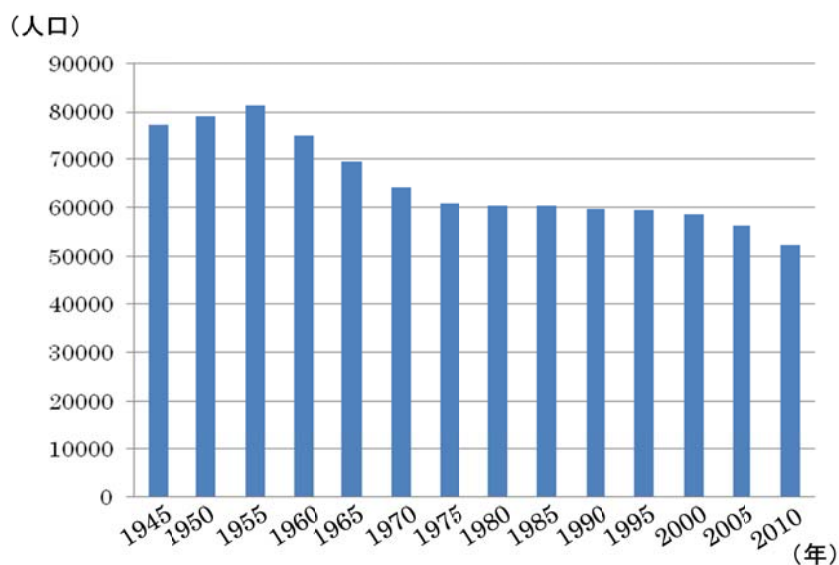


図3) 新喜多方市の戦後人口推移(参照：国勢調査)



3-5. 産業

喜多方市は、会津地方では会津若松に続いて第二の商圈を有しているまちである。

喜多方は自然に恵まれているため、古くから農業が盛んであった。したがって、喜多方では、1965(昭和40)年頃まで稲作を中心とした農業が主要産業であった。しかし、全国的な農業の衰退の流れの中で、この土地でも例にもれず農業従事者が減少していった。

農業が衰退する一方で、非鉄金属、繊維、弱電などの第二次産業に従事する者が増えた。1934(昭和14)年には、国策による工場誘致によって昭和電工の工場が設立されており、ここで働く人も多かった。そして、1975(昭和50)年に設立された本多金属技術の工場もある。しかし、現在では社会的な不景気により、製造業や建設業も昔のような勢いは失われてしまっている。

また、この地には豊富な地域資源を活用した地場産業も存在する。例えば、良質な水や農産物を使った酒・味噌・醤油などの醸造業、漆器や桐材加工などの伝統的工芸などの伝統産業がある。

商業にいたっては、人口減少やモータリゼーションなどの社会的要因により、商店街の個人商店や小規模店は減少し、現在では商店街は衰退の一途を辿ってしまっている。

近年では、観光業に力を入れており、「蔵のまち」「ラーメンのまち」として、喜多方は全国的にも有名になっている。観光客は増え続け、現在では年間100万人を超える観光客が喜多方を訪れている。

図4) 旧喜多方市エリアの産業別就業人口推移(参照：国勢調査)



3-6. 交通

喜多方は、東京から電車で約3時間、車で約4時間の距離である。

1904(明治37)年、喜多方市の南部に喜多方駅が作られ、会津若松―喜多方間に鉄道が開通。これが現在のJR東日本の郡山～新津駅間を結ぶ磐越西線となっている。また、SLばんえつ物語号という蒸気機関車が、1999(平成11)年から会津若松駅―新潟駅間を週末や祝祭日などに定期運航している。

道路網は、南北に国道121号線が縦断し、東西に国道459号線が横断している。1992(平成4)年には、磐越自動車道が会津坂下ICまで開通し、会津若松ICが喜多方の最寄りのICとなっており、そこから車で20分で喜多方に至る。2001(平成13)年からは、東京行き直行高速バスが喜多方から運行されている。

喜多方には直接、高速道路が通っていない。この道路網の不備が工場誘致などを難しくしているという点もあると言う¹²。

図5) 喜多方周辺の交通網(出典：喜多方観光協会HP)



3-7. 喜多方の中心市街地問題と蔵の保全運動と観光

詳しいことは4章で述べるが、喜多方の中心市街地は1970年代にモータリゼーションの影響を受け、近隣の大きなまちに客を取られ、衰退するのではないか、との危機を抱いていた。そこで、1970年代には中心市街地の周りのいらなくなった蔵を壊し、駐車場にしていく流れが起きていた。この状況を憂いた写真家の金田実氏が自ら蔵の写真を撮り、その写真を集めて東京などで写真展を開いた。そして、1975(昭和50)年にNHK新日本紀行で喜多方が「蔵ずまいの町」として紹介されたことで、喜多方に観光客が訪

¹² インタビュー調査より

れるようになる。その一方で、中心市街地では買い物客を呼び戻すために、商店街にアーケードが設置されるという動きもあった(このアーケードは近年、景観を良くするために撤去された¹³⁾)。しかし、その後喜多方ラーメンが、行政の宣伝の効果もあって有名になり、喜多方には多くの観光客が訪れるようになった。このような現象を受けて、市民も自分たちの土地に当たり前にある蔵が貴重なものであると認識するようになり、次第に蔵の保全活動やそれを活用した観光に積極的な姿勢を見せ始める。

¹³ 2011年に小荒井の仲町商店街のアーケードが撤去され、2012年には同じく小荒井にある中央通り商店街のアーケードも撤去された。現在は、電線を地中に配する計画が決定されている。

4章：喜多方の観光まちづくりの歴史

4章では、喜多方市の資料を用いて、喜多方の地域資源であり、観光資源でもある蔵とラーメンの2点についてその歴史から詳しく紹介する。特に蔵に関しては、蔵を保存する活動も大きく観光まちづくりに影響しているので、蔵保存のまちなみについても述べる。

4-1. 歴史

喜多方の観光の歴史は古くない。そのきっかけは、1970年代前半(昭和40年代後半)に一人の写真家が開いた写真展であった。その当時、市街地では、酒・味噌・醤油などの醸造業で使用されていた蔵が、製法の近代化によりその役目を果たさなくなっていた。さらにモータリゼーションの影響から、人々の行動範囲が広がり、買い物客が近くの会津若松などに流れてしまい、地元商店街は頭を悩ませていた。そのため、蔵を取り壊し、地元商店街のために駐車場を設置する計画が考えはじめられていた。また農村でも、農業基盤整備に伴う農作業の機械化の影響により、蔵の改造や取り壊しが進んでいた。このように蔵が取り壊されていく中で、いち早く蔵の魅力を認識し、喜多方の文化遺産を後世に遺そうと金田実氏は蔵の写真を撮り続けていた。そして、1972(昭和47)年、喜多方市内で自身の撮った蔵の写真を集めた写真展を開いた。それに続き、1973(昭和48)年には会津若松市で、その翌年の1974(昭和49)には東京の三菱オートガーデンで写真展を開催した。この金田実氏の写真展によって、喜多方が蔵のまちとして知られ始めるようになる。

次の契機は、1975(昭和50)年に訪れる。この年、NHK総合テレビで「新日本紀行・蔵ずまいの町」が放映された。この番組によって、喜多方は蔵のまちとして全国に知られるようになり、蔵を見ることを目的とした観光客が喜多方を訪れるようになった。ちなみに、この年の観光客入込数は約5万人である。そして、観光客が地元の人に勧められて昼食に食べたラーメンが口コミで広がり、有名となった。1982(昭和57)年には、NHK東北アワー「東北のめん」で喜多方ラーメン紹介され、翌年1983(昭和58)には、喜多方市が旅行雑誌「るるぶ」に喜多方ラーメンを載せた。その後、1980年代後半(昭和60年代)のバブル時代のグルメブームの流れに乗り、喜多方ラーメンは全国で一躍有名になる。その結果、1989(平成元)年には、観光客数は50万人を超えるようになった。

このような観光客増加に伴い、駐車場不足が起こったため、1990(平成2)年、喜多方市によって観光客用の駐車場が整備された。また、1992(平成4)年には磐越自動車道が開通した。そして、その翌年の1995(平成5)年には、ついに喜多方の観光客数が100万人を突破した。

図6は、NHKで「新日本紀行・蔵ずまいの町」が放映された1975(昭和50)年から現在までの旧喜多方市域内の観光客入込数の推移を示したものである。また、図6は合併した2006(平成18)年以降の新喜多方市内全域の観光客入込数を表したものである。

これを見れば、合併後の新喜多方市でいえば、観光客数は毎年150万人を超えていることが分かる。ちなみに、合併時には、喜多方の北部に位置する熱塩温泉も新喜多方市となり、温泉旅館を含むこの温泉街も喜多方市の一部となった。

図6) 1975(昭和50)年以降の旧喜多方市内観光客入込数推移(参照: 喜多方市視察資料)

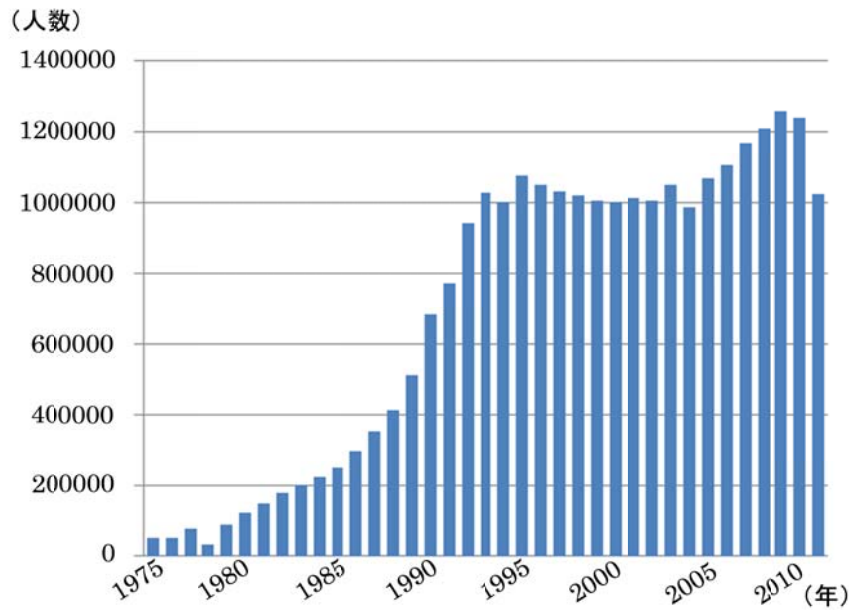
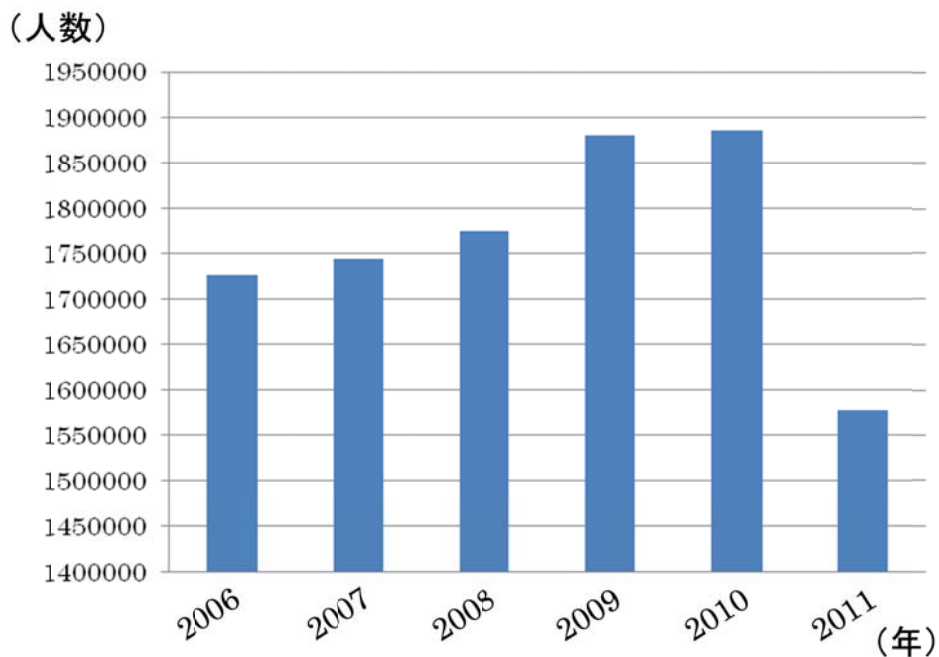


図7) 合併後の新喜多方市全体の観光客入込数(参照: 喜多方市視察資料)



4-2. 蔵のまち

4-2-1. 喜多方の蔵の歴史

現在、喜多方には4100棟¹⁴余りの蔵が存在している。喜多方で蔵がいつ頃から作られ始めたのか正確な資料はないが、江戸時代、特に文化・文政時代(1804年～1830年)の経済力の上昇によって、普及したと考えられている。その当時は、会津藩は経済的苦境のため、農民に「儉約の励行」強要しており、その一方で、殖産興業政策を推し進めていた。したがって、会津藩は建物の新改築には規制を設けており、蔵を建造するには許可が必要だったため、農民たちが蔵を建てることは難しく、蔵を建てることのできたのは、市場開設に関わる商人や、酒・味噌・醤油などの醸造業者、漆器生産者、そして質屋などの一部の業種の者だけであった。しかしその後、嘉永年間(1848～1854年)から安政年間(1854～1860年)以降、農村でも地方三方を中心に蔵を建てるようになった。このように、江戸時代末期から明治大正時代にかけて、商人や醸造業者、漆器などの加工業者、そして一般農民によって、喜多方に蔵が建造されるようになっていった。特に、会津藩の圧力から解放された明治時代に入ってから、旦那衆と呼ばれる大商人たちが市街地に豪華な蔵づくりの建物を建てていった。

そして1880(明治13)年、蔵の実用性を住民たちが認識する事件が起きる。この年、喜多方で大火事が起こった。その結果、この火事で170戸、約300棟の家が焼失した。しかし、そのような災害の中でも土蔵づくりの蔵は残ったのである。これにより蔵の耐火性が実証され、蔵は喜多方で大切にされていくこととなる。

そして、喜多方では「40代で蔵を建てられないのは、男の恥」と言われるまでになり、人々は競って、豪華な蔵を建てるようになった。すなわち、喜多方の男たちにとって、蔵を建てることは自身の誇りをかけた夢であった。

4-2-2. 喜多方の蔵の特徴

喜多方市の資料¹⁵によると、大地震や台風などの天災や太平洋戦争の戦火を免れてきた結果、喜多方には現在でも、4100棟余りの蔵が残っている。その喜多方の蔵の特徴の一つは、多種多様な蔵があることである。喜多方の蔵は画一的なものではなく、粗壁、白漆喰、黒漆喰、煉瓦造りなど多様な素材を使った蔵が多くある。例えば、煉瓦造りの蔵が作られるようになったのは、明治20年代後半に、喜多方に煉瓦工場ができ、大量に煉瓦が生産され始め、洋式建築素材として考えられていた煉瓦がハイカラなものとして脚光を浴びたからである。そして、優れた煉瓦建築技術者だけでなく、棟梁、建具、左官、塗工、の分野に創意工夫に富んだ名工がいたことから、多様な蔵を喜多方の地に建てることのできた。そしてこの根底には、前述した「40代で蔵を建てられないのは、男の恥」という気風を基盤とし、他とは違う立派な蔵を建てようとする喜多方の男たちの蔵に対するプ

¹⁴ 喜多方市HPより

¹⁵ 喜多方市の観光客向けパンフレットより

イドがあった。

しかし、喜多方の蔵が多様なのはその素材だけではない。その蔵の用途も、多様なのである。例えば、住居としての「座敷蔵」、市街地では店舗としての「店蔵」、貯蔵庫としての「商品蔵」、酒、味噌、醤油などを作る「醸造蔵」、漆器職人の作業場である「漆器蔵」があり、そして農村では農産物を保管する「穀物蔵」、農作業を行うための「作業蔵」がある。さらに、防火壁としての塀蔵や厠蔵(トイレ)まで存在する。この背景として、市街地では地域の農産物を活用した醸造業や、漆器業や製絹業等が盛んであったため、生産・保存のために蔵が必要であり、また、農村でも農業を行う際に作業蔵や農作物を保管する穀物蔵が必要であったことが挙げられる。

このようなことから、喜多方の蔵のもう一つの特徴が見えてくる。それは、蔵が人々の生活に密着しているということだ。喜多方では、住居はもちろんそうであるが、人々が仕事を営む場所も蔵であった。このように、市街地、農村の両地域で、それぞれの生活に沿った蔵が、喜多方では共存してきたのである。そして、現在でも喜多方の蔵は、人々が生活を営む場として使われており、人々の生活に必要なものとなっている。

4-2-3. 喜多方蔵のまち観光の起源

喜多方の観光は、「蔵のまち」としてスタートしたので、前述した4-1. 歴史の部分と重複する部分が多い。都市化に伴い、壊されていく蔵に対して危機感を抱いた金田実氏が、写真を通して喜多方の文化遺産を遺そうと思い、1970年代前半(昭和40年代後半)に市内、会津若松、そして東京で喜多方の蔵の写真展を開催したことが始まりである。このことが契機となって、喜多方が「蔵のまち」として知られ始めるようになる。

そして、1975(昭和50)年、NHK総合テレビ「新日本紀行・蔵ずまいの町」で喜多方が「蔵のまち」として取り上げられたことにより、全国から観光客が喜多方を訪れるようになった。また、1979(昭和54)年にも、朝日新聞の「蔵のうちとそと」¹⁶で喜多方の蔵が紹介された。

4-2-4. 蔵の保全活動

先述したように、1970年代、モータリゼーションなどの影響から疲弊していく商店街を救うために、市街地にある使用されなくなった蔵を取り壊し、駐車場にする案が検討されていた。さらに、小荒井にある仲町商店街と中央通り商店街に至っては、商店街活性化を目指し、アーケードを設置し、その結果、現在のふれあい通りの景観は決して良いものとは言えないものとなってしまった。また、農村においても、戦後の農作業の機械化・効率化に伴い、蔵の改造や取り壊しが進んでいた。

しかし、時を同じくして、金田氏の写真展やNHK「新日本紀行・蔵ずまいの町」の放映により観光客が喜多方を訪れるようになった。この観光客の訪問がきっかけとなり、生

¹⁶ 1979年、朝日新聞第二福島版に掲載。

活に根付き、「蔵はあって当たり前なもの」と蔵を軽視していた喜多方の人々が、蔵はどこにでもあるものではなく、自分たちのまちを代表する重要なものであると再認識することとなった。このような流れを受けて、1980(昭和50)年には、喜多方市教育委員会によって伝統的建造物保存地区調査¹⁷が行われている。行政としても1980年代後半から、蔵のまちとして町並みの景観を良くしようとする取り組みが行われ始める。1986(昭和60)年には、喜多方の蔵の町並みを守りつつ、生活環境を改善し、住みよいまちを作るため、「歴史的地区環境整備街路事業」の調査が開始された。この事業は、現在に至るまで継続しており、喜多方では今現在も街路整備工事が行われている。1987(昭和62)には、地域に根差した建築づくりを奨励する「HOPE計画」が策定された。続いて、1988(昭和63)年からは、解体を余儀なくされた蔵や民家を一つの土地に移し、蔵づくりの文化を後世に伝えることを目的とした「蔵移築再生事業」が始まった。この事業は、1991(平成3)年度に建設省の「手づくり郷土(ふるさと)賞」を受賞し、そして、1993(平成5)年、ついに「喜多方 蔵の里」としてオープンした。さらに、1995(平成7)年には、この「喜多方 蔵の里」の隣に喜多方美術館が開館している。また、1989(平成元年)年には「喜多方市蔵保存奨励補助金交付要綱」が制定され、これにより改修をする蔵の所有者に補助金を出すことができるようになった。しかしながら、「改修工事補助対象工事費1千万円以内で補助率4.5%」とその額が少額であることから、18年間で交付を受けた件数が71件、交付額が844万円となかなか活用されていないのが現状である。

また、喜多方市は1995(平成7)年に、喜多方市内の蔵の全所有者に対して「蔵に対する所有者意識調査」¹⁸を行った(回収率は77.8%)。この中で、「蔵を保存すべきか?」という問いに対して96.5%(「積極的に保存すべき」・「できるだけ保存すべき」を含む)の人が保存すべきだと答えており、「蔵の保存にあたっての課題は何か?」という問いには約60%の人が「維持費が高いこと」と答えているのも関わらず、圧倒的に蔵の保存を支持する人が多いことがわかる。

¹⁷ 1980年に喜多方市教育委員会が行った調査。『伝統的建造物保存地区調査報告書』が存在する。

¹⁸ 大野友平ほか「喜多方における地域資源を活かしたまちづくりの実践 その1～まちづくりの現況と課題」2004年 P1190より

図8)「蔵に対する意識調査」結果(出典:「喜多方における地域資源を活かしたまちづくりの実践 その1～まちづくりの現況と課題」¹⁹⁾)

蔵の保存についての考え方

積極的に保存すべき	できるだけ保存すべき	保存しなくても良い	その他	合計
384	835	25	20	1264
30.4	66.1	2	1.6	100%

蔵の保存(保存すべき理由)

文化遺産として価値があるため	風土と生活に密着した建物であるため	喜多方市の誇れるものの一つであるため	観光資源であるため	その他	合計
579	532	217	198	34	1560
37.1	34.1	13.9	12.7	2.2	100.00%

蔵の保存方法につて(考え方)

保存地区を選定し重点的に保存	全域で蔵を選定し保存する	地区や蔵の選定をせずに個別に保存	わからない	その他	合計
81	300	718	120	18	1237
6.5	24.3	58	9.7	1.5	100.00%

蔵の保存にあたっての今後の課題

維持費が高いこと	職人の不足	生活様式の変化	後継者のいないこと	その他	合計
845	298	166	80	50	1434
58.9	20.4	11.6	5.6	3.5	100.00%

この調査からわかることは、20年前までは生活の中で当たり前となっていた蔵の魅力に気付かず、蔵の取り壊しが進められていたが、観光を通じて自分たちのまちが「蔵のまち」として知られるようになったことで、喜多方の人々が蔵の大切さを再認識し、蔵に対する意識が変化してきたということだ。このような変化を受けて、1995(平成7)年、蔵を愛する62名が集まり、市民の手で任意団体の「蔵の会」が設立された。この会は、

¹⁹⁾大野友平ほか「喜多方における地域資源を活かしたまちづくりの実践 その1～まちづくりの現況と課題」2004年 P1190より

地域の歴史的風土や市民の心の象徴として培われてきた蔵への認識を深めながら、蔵に表出させたまちづくりの思想的背景と気概を継承発展せしめることで、地域経済、社会文化の振興に寄与することを目的としている。²⁰

図9) 喜多方の蔵の保全活動年表

1980(昭和55)年	喜多方市教育委員会が伝統的建造物保存地区の調査を実施
1986(昭和61)年	喜多方市が歴史的地区環境整備を開始
1987(昭和62)年	喜多方市が風土に根差した建築づくりを奨励するためのHOPE計画を作成
1988(昭和63)年	喜多方市が蔵移築再生事業を開始
1989(平成元年)	喜多方市が蔵保存奨励補助金交付要綱を施行
1992(平成3)年	蔵移築再生事業が建設省の「手づくり郷土(ふるさと)賞」を受賞
1994(平成5)年	「喜多方 蔵の里」開館
1995(平成6)年	蔵の会発足

4-3. ラーメンのまち

4-3-1. 喜多方ラーメンの歴史

喜多方市の資料²¹によると、喜多方ラーメンは、大正末期から昭和初期に誕生したとされている。その当時、中国から日本に渡ってきた青年であった藩欽星氏が屋台を引いて支那そばを売り歩いていた。これが喜多方ラーメンの元祖である(ちなみに、この店は現在も喜多方に「源来軒」という名で存在している)。そして戦後、戦前からラーメン店を営業していた人に加え、中国から引き揚げてきた人たちもラーメン店を営むようになり、喜多方でラーメン店は増加していき、現在では約120店舗が喜多方市内に存在する。この土地でラーメンがこれほど栄えた背景としては、ラーメンを作るための良質な水があることと、雪国で生きる人々にとってラーメンが貴重なタンパク源となったことが挙げられる。そして、今では喜多方ラーメンは、札幌ラーメン、博多ラーメンと並び、日本三大ラーメンの一つとなっている。

4-3-2. 喜多方ラーメンの特徴

喜多方ラーメンのスープは、基本的には伝統産業である醤油を使った醤油味であるが、店によって、味は様々であり、塩味や、醤油と塩の中間の味といったものもある。

そして、喜多方ラーメンの麺は、水分を多く混ぜでじっくり寝かせた太くて縮れた「平内熟成多加水麺」である。この麺には、コシと独特の縮れがあり、麺を食べる時に、この縮れが多量のスープを口の中に運んでくれるので、麺とスープを同時に味わうことができ

²⁰ 蔵の会HPより

²¹ 喜多方市観光客向けのパンフレットより

るのである。

しかし、喜多方ラーメンが美味しいワケは、喜多方の土地に答えがある。周囲の山から流れてくる良質な水によって麺が作られ、また、その水と喜多方でできた農産物を使った喜多方の醤油や味噌からスープが作られ、美味しい喜多方ラーメンができるのだ。

4-3-3. 喜多方ラーメン観光の起源

喜多方ラーメンが有名になったのは、喜多方が「蔵のまち」として観光客が訪れるようになったからである。当時、「蔵のまち」として蔵を見ることを目的として訪れた観光客が、地元の人におすすめの昼食を聞いたところ、地元の人たちはすでに地域に根差した人気をもっていた喜多方ラーメンを勧めた。この評判が口伝えに伝わって有名になり、1982(昭和57)年には、NHKテレビ東北アワー「東北のめん」で喜多方ラーメンが紹介された。また、喜多方市としても、喜多方ラーメンを食べてもらうことで、蔵を目的に訪れている観光客たちの滞在時間を延長することができると考え、ラーメンの宣伝に力を入れることにした。1983(昭和58)年、喜多方市は旅行雑誌「るるぶ」のページを買取り、喜多方ラーメンを紹介した。この効果は絶大で、発売後、問い合わせが殺到した。そして、1985(昭和60)年にも、NHKテレビ「おはようジャーナル」追跡ラーメンの香りただよう蔵の町」が全国放映されている。また、この頃(1980年代後半(昭和60年代))、世間はグルメブームに沸いていた。この影響もあり、喜多方ラーメンの人気は一気に高まり、観光バスで喜多方ラーメンを食べるためのツアーまで誕生した。このように、最初は蔵を見ることを目的としていた観光客であったが、喜多方ラーメンの人気が上昇するにつれて、ラーメンを目的とした観光客が増えていった。

4-3-4. 蔵のまち喜多方老麺会(くらのまちきたかたらーめんかい)

ラーメンが有名な喜多方には、「蔵のまち喜多方老麺会」という組織がある。この団体は増加する観光客に対応するため、1988(昭和63)年にラーメン店と製麺業者46軒が加盟する任意団体として発足した。加盟店は組織化することによって、情報の交換や保健所の許認可手続きなどのメリットを得ており、2005(平成7)年には、老麺会は活動の強化を図るため、任意団体から協同組合となっている。現在、加盟店には「老麺会」と書かれた共通ののれんがかけられており、また老麺会は、加盟店を紹介した「老麺会マップ」を独自に作成し、配付している。このマップは、老麺会が喜多方観光協会とタイアップしているため、加盟店のラーメン店内だけではなく、観光案内所や観光施設にも置かれており、観光客にとってよく目にするようになってきている。その他にも2月に行われる喜多方冬まつりのラーメンフェスタでは、老麺会は中核的存在として活躍している。こうした組織の設立、そしてその活動は、以後、ラーメンなどを観光のセールスポイントとしてまちおこしを図ろうとする他の地域団体の手本となっていると言われている。²²

²² 喜多方市の観光パンフレットより

資料 1 0) 老麺会マップ 資料 1 1) 共通ののれんを飾る老麺会加盟店(写真)



4-3-5. 市民の生活に根差した喜多方ラーメン

喜多方は、市内に約120店のラーメン店があり、人口比に対して「日本一ラーメン店の多いまち」²³である。この数は、ラーメンがいかに地元の人に食べられる地域に根差した食べ物であることを示している。ラーメンがこの地に普及した背景としては、ここが山に囲まれた雪国であることが挙げられる。海産物や肉類が手に入りにくかった時代に、ラーメンは雪国の喜多方の人々にとって貴重なタンパク源であり、また手ごろなごちそうであった。喜多方の人々に好きなラーメン店を尋ねてみると、その答えは有名店一択ではなく、それぞれの好みの自分の好きなラーメン店を教えてくれる。ラーメン店の数から考えても、もともと110店舗ほどあったラーメン店も、グルメブームの時にやや増えて130店舗ほどになったが、現在ではまた120店舗程度となっており、観光客の増加に対して急激にラーメン店が増えているわけではない。このことから、地元の人々に愛されるラーメンでなければ、やっていけないことがよくわかる。²⁴ラーメンが喜多方の地によく根差している例として、「朝ラー」がある。朝ラーとは、朝からラーメン屋でラーメンを食べることであり、現在、約6店舗が朝早くから営業し(最も早い店で7時から)、人々にラーメンを提供している。昔は、喜多方にある昭和電工や本多金属技術などの工場は三交代制であり、夜勤の人が多くいた。このような人たちが夜勤明けにラーメンを食べたことで、喜多方に朝ラーが定着したのである。そして現在では、朝早くからスポーツをする市民たちが練習の後にラーメンを食べに来るといった現象が起こっている。たしかに、ラーメンを目的にやってくる観光客は多く、旅行雑誌やテレビなどのメディアでもよく紹介され、大いに観光化されている喜多方ラーメンではあるが、しかしその一方で、このラーメンは喜多方の人々にとって、重要な生活の一部という側面も持ち合わせているのである。

²³ 合併前の旧喜多方市では、約37000人の人口に対し、約120軒のラーメン屋があり、対人口比で日本一ラーメンの多いまちであった。

²⁴ 市役所へのインタビュー中に、市役所の方が「地元の人に好かれない店はつぶれてしまう」と言われていた。

5章：喜多方のまちづくり活動

喜多方のまちづくり活動は2000年代に入ってから、活発になっていった。その契機として、東京大学都市デザイン研究室とあいづデスティネーションキャンペーン、そして喜多方の地方元気再生事業「日本一の蔵再生によるまちおこし」の3点を説明した上で、2章で述べた「観光—地域づくり循環」がどのように喜多方で創り出されていったのかについて考察する。

5-1. 2000年代の喜多方のまちづくり活動

2001年から喜多方のまちづくりに東京大学都市工学科都市デザイン研究室が参加した。この研究室の北沢猛教授は幼少期を喜多方で過ごしたこともあり、この土地に縁があったため、アーバンデザイナーとして積極的に喜多方のまちに様々な提案を行っていった。この東大研究室の参加によって、喜多方の人々のまちづくりへの関心は高くなり、蔵保全のための市民団体も誕生した。そして、2000年代中頃からは、JRを中心とした「あいづデスティネーションキャンペーン」という観光イベントも開催され、観光による市民の連携も強められていった。そして2008年度、2009年度に行われた政府から資金援助を受けた地方の元気再生事業は、それまでの経験から住民主体の活動へとようになってきている。以下は、2000年代の活動について詳しく説明したものである。

5-1-1. 東京大学都市デザイン研究室

喜多方のまちづくりに携わっている人のお話を聞くと、「喜多方のまちづくりにおいて、東大の北沢教授の存在は大きかった」と言われる方が多い。実際に、この東京大学都市工学科都市デザイン研究室の参加によって、それ以降の喜多方のまちづくりは、景観保全のための土地区画整備などのハード面、蔵保全のためのイベント開催などのソフト面、この両面から積極的に行われていった。また、これらの影響から、喜多方の人々のまちづくりへの関心は高くなり、蔵保全のための市民団体²⁵も誕生した。まちづくりにはよく、「よそ者、バカ者、若者」が必要だと言われるが、喜多方にとって東大の北沢研究室とはまさに「よそ者」であった。つまり、東大の参加によって、「外側からの視点」を取り入れたバランスの良いまちづくりが行われていったのである。

この東大研究室の参加は、2001(平成13)年に遡る。この年、文化庁と(財)日本ナショナルトラストから、「東北地方における都市間連携による広域観光圏整備計画調査～地域の文化財や歴史的特性を活かした広域観光作りに関する調査～」を東京大学都市工学科都市デザイン研究室が委託された。そして、この研究室の北沢猛教授²⁶は、長野県生まれではあるが、幼少期を喜多方で過ごしており、この土地に縁があったため、この調査以来、

²⁵ 2003年、小田付に蔵保全を目的とした会津北方小田付郷町衆会が結成される。

²⁶ (1953-2009)東京大学卒業後、横浜市に入庁し、横浜みなとみらいの都市計画を担当。その後、アーバンデザイナーとして活躍。

研究室には喜多方チームが設置され、喜多方と東京大学の交流が始まることとなる。2001(平成13)年の年末には、先の調査の報告会である「蔵のフォーラム」を蔵の会と共に開催し、中心地と周辺部の交流を図るなどの「喜多方観光まちづくりの提案」を発表した。また、このフォーラムには、白井英男喜多方市長、喜多方市役所の職員、市内商店街の経営者や一般の市民など200名が来場し、「蔵を中心に、生活と観光がうまく融合したまちづくりを行っていくことの必要性が再確認された」²⁷。これを受けて、翌年の2002(平成14)年には、喜多方の蔵を知ってもらいために、「蔵みっせ」というまちづくりイベントを、蔵の会や小荒井にあるふれあい通りと連携して開いた。

ちょうどその頃、喜多方の東側にある小田付では徐々に高まる蔵保全の動きを受けて、2003(平成15)年、主に景観保存を目的として「会津北方小田付郷町衆会」²⁸を結成していた。その翌年の2004(平成16)年、東京大学都市デザイン研究室喜多方チームは、小田付郷町衆会や喜多方市役所と連携して、小田付にある酒造が所有する空き蔵を借り、まちづくり活動の拠点となることを目的に、市会議や休憩、情報発信を行う場として「まちづくり寄合所」を作った。この寄合所は、観光ボランティアによる観光案内、小田付郷町衆会、行政、学生のミーティング、学生の活動拠点やイベント拠点、そして市民講座などの場として活用され、翌年にはカフェとして活用したいという借り手が見つかったので、寄合所はさらに新たな空き蔵へと移動した。

2005(平成17)年から、福島県喜多方建設事務所(受託研究「民間学の連携した喜多方まちづくりの実践」)のサポートの下、「喜多方まちづくり研究会」²⁹が運営され、官民学が集まり、地域の現状を調査し、喜多方の将来について議論が重ねられ、「歴史・文化・自然を活かした持続可能なまちづくり」を基本理念とし、2006(平成18)年に「喜多方まちなかプラン」を策定した。このような研究活動を踏まえ、2006(平成18)年に、地域の主要なまちづくり団体を集めた「喜多方蔵のまちづくり協議会」³⁰が設立した。この協議会は、行政として喜多方市、民間団体として、蔵の会や小田付郷町衆会などの団体、そして学術機関として東京大学都市デザイン研究室喜多方チームなど官民学を合わせた25団体から成立しており、この構成団体が連携してまちづくりを行うために作られたものである。そして、この喜多方蔵のまち協議会はまちづくりの総合連携型マネジメント組織³¹としての機能を果たすこととなり、現在も喜多方のまちづくりの中核を担う存在として活躍している。

そして、2007(平成19)年、東京大学の都市デザイン研究室が喜多方に来てから7年が経ち、それまでの活動の一つの集大成として「喜多方蔵のまちづくり博覧会(くらはく)」

²⁷ 東京大学都市デザイン研究室有志「2002年度地域づくりサポート事業実施報告者」2003年

²⁸ 小田付地区の蔵の町並み保全のために、2003年に結成。

²⁹ 図12参照

³⁰ 図14参照

³¹ 野原卓「喜多方における実践都市デザイン」『季刊まちづくり27号』2010年P97

が開かれた。「くらはく」は10日間開催され、その中では、2005(平成17)年から東京大学喜多方チームによって提案されていた、まちの中に休み処を設けるという「くらにわ」の社会実験が実施されたり、喜多方の魅力やまちづくり活動を紹介した「まちづくり展」が開催されたり、「蔵cafe」や「蔵Bar」などの各種イベントが行われた。また、参加者とまちづくりについて語り合う「まちづくり語り合い」も計4回開催され、それを踏まえて、最終日前夜には「まちづくりフォーラム」が開かれ、これまでの喜多方まちづくりの活動の紹介や、東京大学喜多方チームの「喜多方まちづくり7つの提案」³²を発表、そしてこれからの喜多方の将来についての議論が行われた。「くらはく」の開催は、喜多方の蔵を市民によく知ってもらい、自分たちのまちについて考えてもらったことで、住民主体のまちづくりを促す効果があったと言えるだろう。このように、「よそ者」としての東大チームの提案から、多くのまちづくりイベントが開催され、その結果、市民のまちづくりに対する関心は徐々に高まっていった。

図12) 喜多方まちづくり研究会の連携体制(出典:「民間学の連携による地方都市中心しがちの将来ビジョン形成に関する研究」)

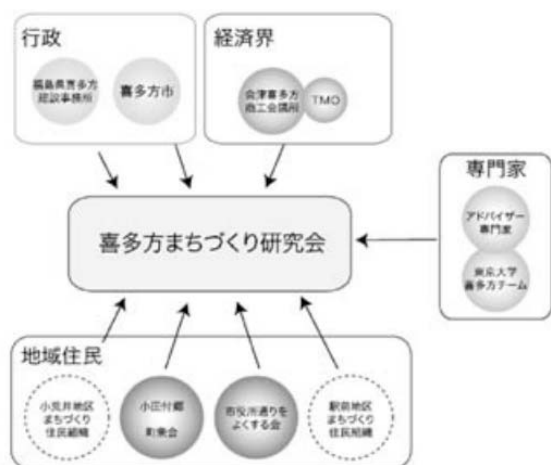


図13) 喜多方まちづくり7つの提案(参考:「喜多方における実践都市デザイン」)

- | | |
|---|--|
| <p>1 <u>もう一度蔵を使いこなす</u>
(蔵と資源の再生活用)</p> <p>2 <u>歩いて心地よいみちにする</u>
(快適な歩行者環境)</p> <p>3 <u>極上の会津文化を味わう</u>
(まちなかと周辺も含めた文化連携)</p> <p>4 <u>滞在時間を倍増する</u>
(喜多方の新しい観光スタイル戦略)</p> | <p>5 <u>くらとにわを育む</u>
(くらにわによる外部空間整備)</p> <p>6 <u>水と緑を中心にまちをつくる</u>
(景観と環境を生かしたまちづくり)</p> <p>7 <u>まちづくり仲間をつくる</u>
(組織体制支援体制の確立)</p> |
|---|--|

³² 図13 参照

5-1-2. あいづデスティネーションキャンペーン

東大研究室の参加もあり、2000年代から活発になってきた喜多方のまちづくりであるが、まちづくりに携わる人々の連携を深めるきっかけとなったのが、福島県あいづデスティネーションキャンペーンである。「福島県あいづデスティネーションキャンペーン(以下、あいづDC)」とは、2005年(平成17)年に、全国のJR6社と会津地方の21市町村と住民が連携して3ヶ月間行われた観光キャンペーンである。このキャンペーンに先立ち、会津地方の21市町村は「福島県あいづデスティネーションキャンペーン推進協議会」を設立し、喜多方では「喜多方観光協会」がこのイベントの喜多方担当となった。この喜多方観光協会とは、喜多方の観光情報を発信している団体であるが、その中の9割の人は喜多方市産業部観光課の職員である。そして、喜多方では、このキャンペーン中に喜多方で何を行うか話し合う場として、「福島県会津デスティネーションキャンペーン喜多方地区推進委員会」を設立した。この委員会には観光関連事業者など住民19名が参加し、官民一体となって、この大規模な観光キャンペーンにのぞむ体制ができあがった。しかし、この委員会のメンバーの中には、初対面同士の人もおり、最初からうまく連携がとれたわけではなかった。しかし、話し合いを行い、情報を共有し、共通認識をもつことで、今回のあいづDCの喜多方でのテーマを「滞在時間の延長」に決定した。そして、話し合いの結果出た多くの意見をもとに、委員会のメンバーを「観たい・遊びたい部会」、「食べたい部会」、「癒されたい部会」の3つの部会に分け、キャンペーン中の企画を進めていった。

そして、2005(平成17)年夏、ついにあいづDCが開催された。これに伴い、キャンペーン期間中、JRは土日祝日に上野駅～会津若松・喜多方に「特急あいづ」を運行し、また首都圏のJRの駅にはあいづDCの特大ポスターが貼られ、あいづ一色となり、さらにテレビでCMまで放送されていた。喜多方でも、市の予算で「あいづDC喜多方版パンフレット」作成し、この大規模観光キャンペーンに気合を入れていた。この期間中に喜多方で行われた観光イベントの一つとして、中央通りで2日間にわたって開かれた「レトロ横丁」がある。これは「誰もが希望に燃えていた昭和30年代」を思い出そうと、企画されたものであったが、中央通りを車両通行止めにするための警察との交渉や、ボランティア不足などの問題が浮上した。これを解決するために行動したのが会津喜多方商工会議所青年部の若者たちであった。その結果、「レトロ横丁」は総勢55000人もの人が集まった成功イベントとなった。このように喜多方では官民一体で取り組んだ結果、この年の観光客入込数は前年から4.4%増の147万8千人となり、あいづDC期間中に限れば、前年度比110%であった。

しかし、あいづDCが喜多方にもたらしたものはそのような数字だけではない。あいづDCの推進委員長がその当時、次のように言っている。「これまでは自分の会社のことで精一杯だったけれど、50歳になり、それだけではいけないと思うようになった。自分の住むまちに貢献しなければならなかった」と。このように、あいづDCは市民にまちづくりに積極的に参加する姿勢をももたらした。さらに、今回、あいづDC喜多方地区推進

委員会を作り、その中で議論を交わし協力し合い、あいづDCという一つの企画にのぞんだことで、観光によるヒューマンネットワークも形成され、地域の連携を深めた。

その翌年からあいづDCは「この夏も会津へキャンペーン」という名になり、また同時に「極上の会津キャンペーン」も始まり、会津地方は会津として一つの観光圏を築いていた。「この夏も会津へキャンペーン」と「極上の会津キャンペーン」は2006(平成18)年～2010(平成22)年まで継続して、それぞれ7月～9月、7月～11月の期間で開催された。喜多方でも、「あいづDC喜多方推進委員会」を2016(平成18)年「極上の会津喜多方推進委員会」に改め、3つの部門も「見たい部会」、「遊びたい部会」、「食べたい部会」、「癒されたい部会」の4部門に再組織化した。しかし、前年とはちがい、あいづDCの経験を踏まえたことで、「それぞれの活動も自然発生的に行われるようになり、協会はむしろサポートにまわることが多くなった」³³という。

交通に関して言えば、この年からJRを利用する観光客向けに「ぶらりん号」というバスを運行した。これに乗れば、喜多方市街地だけでなく、郊外にある三津谷、杉山、新宮熊野神社長床や願成寺などの観光地に行くことができる。また、もっと広域な交通網でいえば、喜多方から山形県米沢まで運航していた定期バスであるレインボーライナーの利用客が伸び悩んでいたことから、「置賜・会津広域観光ネットワーク委員会」を設置し、会津若松まで路線を延長した。このように交通網を充実させることで会津内での回遊性を高めた。観光協会の作成した資料の中にも、「会津若松や猪苗代などの有名観光地の恩恵をこうむるというのも観光誘客作戦の一つ」であり、「身の丈に合ったそのまちらしい自己表現をすることの延長線上に、広域観光の魅力が発生している」と書かれている。

「この夏も会津へキャンペーン」と「極上の会津キャンペーン」が最初に開始された2006(平成18)年は、喜多方市、熱塩加納村、塩川町、山都町、高郷村の5市町村が合併し、新喜多方市が誕生した年でもある。合併し、喜多方にはさらに魅力的な観光資源が増えた。しかし、元は違う市町村なのだから、合併したからといって、それがすぐに同じ意識で行えるわけではい。だから、喜多方市としても新喜多方市内の広域的な観光振興策の展開に迫られていた。そこで開催されたのが「この夏も会津へキャンペーン」と「極上の会津キャンペーン」であった。前の熱塩加納村の地域では、農村で「収穫体験ウォーク」が行われた。この熱塩加納地区で行われたイベントに、旧喜多方市内のまちづくり団体「あいべ」が手伝いにやってきたという。この経験から、観光まちづくりが合併の垣根を取り払うことを促進することができるということがわかる。³⁴

³³ 喜多方観光協会「2006 夏 福島県あいづデスティネーションキャンペーン後の喜多方」P4

³⁴ 喜多方観光協会「2007 夏 福島県あいづデスティネーションキャンペーン後の喜多方～3年目の正直～」P4に「「観光のまちづくりが合併の垣根を取り払うことを促進するのだ」ということを実感させられる光景だった。」とある。

5-1-3. 喜多方の元気再生プロジェクト「日本一の蔵再生によるまちおこし」

2000年代に入り、喜多方のまちづくり活動の成熟さを表しているのが、2008年度から2カ年続けて行われた喜多方の元気再生プロジェクト「日本一の蔵再生によるまちおこし」である。このプロジェクトでは、官民関わらず、まちづくりに携わる人たちを中心に組織された「喜多方蔵のまち協議会」が中心となり、様々なジャンルのまちづくり活動が実施されていった。

《平成20年度元気再生事業》

国は地方のまちづくりや産業の活性化を支援するために、2008(平成20)年度、「地方の元気再生事業」を開始した。この事業に指定されれば、国から事業費が全額補助されるということで、全国から1186件の提案が提出された。喜多方でも「喜多方蔵のまちづくり協議会」³⁵を提案主体とし、「日本一の蔵再生によるまちおこし」と題し、国に提出した。その結果、喜多方の「日本一の蔵再生によるまちづくり」は、採択された120事業の一つとなり、約3千万円の予算を国から得ることになった。

そして、この蔵のまちづくり協議会の事務局となったのが、「NPO法人まちづくり喜多方」である。この団体は、以前は「NPO法人環境ストレンクス」という名前で、主に自転車タクシー「ペロタクシー」を運行する団体として活動していた。しかし、市民主導のまちづくり活動が高まってきている中で、地域の経済人たちから、「活動の幅を広げ、地域のために活動をしてほしい」という要望を受け、2007(平成19)年に団体名を「NPO法人まちづくり喜多方」と改称した。

さて、2008(平成20)年度の喜多方の元気再生事業「日本一の蔵再生によるまちおこし」の実施団体は、蔵の会、観光協会、小田付郷町衆会、NPO法人まちづくり喜多方、喜多方のれん会、商工会議所、県建築士会喜多方支部の7団体となり、また、実行部隊として、「喜多方の元気再生プロジェクト会議」が立ちあげられ、ここには喜多方蔵のまちづくり協議会に所属する団体の中のメンバーから33名が集められた。

そして、2008(平成20)年度事業は、以下の12分野23事業となった。()内はそれぞれの実施主体である。

- ① 蔵の写真展とシンポジウム(蔵の会、観光協会)
- ② 蔵の登録有形文化財促進(蔵の会)
- ③ 蔵ガク(学)蔵ベン(勉)(蔵の会)
- ④ 蔵の実態把握調査(蔵の会)
- ⑤ 保存と再生のための「蔵手本」の作成と後継者育成(県建築士会喜多方支部、蔵の会)
- ⑥ 蔵のコンサルティング機能を持ったシンクタンクの創設(蔵の会)
- ⑦ 蔵を活用した社会実験(NPO法人まちづくり喜多方、観光協会)
- ⑧ 蔵を活用したグリーンツーリズムの実践(観光協会)
- ⑨ 蔵を活用した観光新ルートの開発(観光協会)

³⁵ 図14参照

- ⑩ 観光コンシェルジュ(観光案内役)の養成と認定(観光協会)
- ⑪ 発酵醸造など歴史的産業と融合した新たな事業発掘(商工会議所)
- ⑫ 蔵のまちにふさわしい食の観光素材の発掘(喜多方のれん会)

この事業の目的が、元気再生事業を契機として、周辺部を含めた新喜多方市全体で、市民が意識を共有できる「蔵」をキーワードとした取り組みを行うことで、蔵を活用した中心市街地の活性化、都市と農村の交流促進、喜多方ブランドの推進による観光業や農林業、地場産業を振興させよう³⁶というものなので、事業内容としては、観光的な要素を含む事業も存在するものの、主には住民が蔵を知って、守って、見せて、新喜多方市としての一体感を醸成するためのものが多くなっている。

観光まちづくりの取り組みとしては、「⑩観光コンシェルジュの養成と認定」がその一つである。喜多方では、あいづDCの前年である2004(平成16)年から、市長のアイディアにより、観光都市として「おもてなしのまちづくり」が進められていた。それを受けて、この元気再生事業の中で、観光客により上質なおもてなしを提供するために観光コンシェルジュ認定制度を導入した。講習を経て、認定試験を合格することで、観光コンシェルジュになることができ、受講者は主に観光協会の職員や旅館の女将さんやお土産物屋さんなどの観光業に携わる人である。

この元気再生事業を行った結果、2008年の観光客入込数は174万5千人と前年に比べて1.4%増加し、事業を行った9月～12月の期間中に限って言えば、前年比10%増であった。また、国の評価でも最優良を得ることができた。さらに、国土交通省の地方の元気再生事業の事業実施調書には、喜多方での事業において二つの成果³⁷が記されている。一つは、喜多方市全域における各団体・市民間の交流連携を進め、地域が一体となった持続可能なまちづくりを促進するためのネットワーク化。二つ目は、蔵の保存と利活用を進め交流人口の拡大を図ることにより、産業の振興や雇用の創出といった地域の課題解決である。二つ目は、産業の振興や雇用創出などの地域課題を完璧に解決するまではいっていないが、観光客入込数の増加や蔵保全に寄付が寄せられたことから考えると、蔵の保存と利活用を進め交流人口を拡大したと言える。また、この年の事業を通して、住民が蔵を大事にしていることが分かったが、経済的に厳しい面もあるので、地域の力で保存する蔵の数を増やす必要があるということがわかった。

〈平成21年度元気再生事業〉

喜多方の元気再生事業「日本一の蔵再生によるまちおこし」は、2009(平成22)年度も、蔵のまち協議会を中心に引き続き実施された。この年の事業は、「蔵風景のあるまちプロジェクト」、「蔵のことは「喜多方に聞け！」プロジェクト」、そして「魅力ある喜多方

³⁶ 内閣府HP「地域活性化ニュース 日本一の蔵再生によるまちおこし～福島県喜多方市」より

³⁷ 国土交通省の「平成20年度地方の元気再生事業の事業実施調書」2008年より

観光・産業創出プロジェクト」の3つのプロジェクトに分けられて、10事業が行われた。以下は、この年度の事業内容である。()内は実施主体団体名。この年の事業実施団体は、蔵の会、観光協会、NPO法人まちづくり喜多方、小田付郷町衆会、市役所通りを良くする会、商工会議所の6団体であった。

【蔵風景のあるまちプロジェクト】

- ① 常設写真展の開催(蔵の会)
- ② 景観モデル地区指定支援(小田付郷町衆会)
- ③ まちづくりモデルプラン策定(市役所通りを良くする会)

【蔵のことは「喜多方に聞け！」プロジェクト】

- ④ 蔵のまちづくりセンター開設(NPO法人まちづくり喜多方)
- ⑤ 蔵の利活用の推進(蔵の活用)
- ⑥ 伝統工法の継承支援(蔵の活用)
- ⑦ 蔵情報データベースの整備(蔵の会、NPO法人まちづくり喜多方)

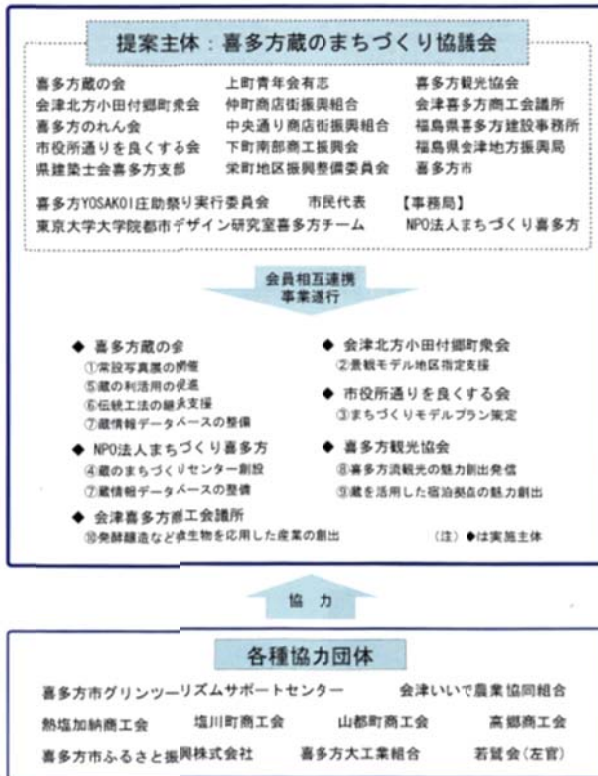
【魅力ある喜多方観光・産業創出プロジェクト】

- ⑧ 喜多方流観光の魅力創出発信(観光協会、商工会議所、蔵の会)
- ⑨ 蔵を活用した宿泊拠点の魅力創出(観光協会)
- ⑩ 発酵醸造など微生物を応用した産業の創出(商工会議所)

図14) 2009(平成21)年度の元気再生事業の事業体制(出典：喜多方の元気再生ダイジェストぶっくH21)

平成21年度事業実施の体制

♪年目となる今年度も、昨年同様に官・民・学の25団体が連携するとともに、多くの市民が参加し、市域全体が一丸となって取組みを進めることにより、広域的な連携の確立と継続したまちづくりが可能となりました。



結果的に、この年の観光客入込数は、185万9千人³⁸、事業期間中の6月～12月では前年に比べ、6万人増加であった。そして、喜多方ではこの年も、国から前年に引き続き最優良評価を得ることができた。国土交通省の「平成21年度地方の元気再生事業実施調書」の中で、この年の事業成果³⁹としては以下の三つが挙げられた。一つ目は、市域全体に存在する蔵を通して、各団体・市民間の更なる一体感を醸成しネットワーク化を図るとともに、蔵のあるまち並みを活かしたまちづくりプラン策定・住民協定締結を目指す動きになったこと。二つ目は、蔵のコンサルティング機能として「喜多方蔵のまちづくりセンター」が作られたこと。そして三つ目は、蔵の新たな利活用を進め交流人口の拡大を図ることにより、産業の振興や雇用の創出といった地域の課題解決を図ることができたことだ。(一つ目と三つ目は、前年にも同様に書かれた成果である。) 二つ目の「蔵のまちづくりセンター」というのは、「④蔵のまちづくりセンター開設」事業によって誕生したものである。これは、蔵に関する情報、保全や利活用などに対応する窓口がないという問題点から、蔵に関する事業を継続的に取り組む組織として作られ、この年だけでも、蔵の補修や利活用に関して約30件の相談が寄せられた。この組織は、NPO法人まちづくり喜多方によって運営されており、現在では市外からも相談がきている。

³⁸ 喜多方市「視察資料」2012年より

³⁹ 国土交通省「平成21年度地方の元気再生事業実施調書」2010年より

喜多方の元気再生事業はこの2年度で終了したが、これを活かして、現在でも蔵のまちづくり協議会を中心に地域資源である「蔵」を基盤としたまちづくりが行われている。

5-2. 喜多方における「観光—地域づくり循環」の形成

ここでは、喜多方における2000年代の活動を、2章で説明した「観光—地域づくり循環」の構造を使って考察していく。2章でも述べたが、新しい観光に必要なことは、地域の魅力を向上させ、活動を持続的なものにするための「観光—地域づくり循環」である。この循環を成立させるために必要となってくるのが、「地域づくりの技術」と「集客の技術」である。「地域づくりの技術」には大きく二つあり、一つは地域づくり型観光事業者を育成すること、もう一つは地域連携の場を作り出すことである。そして、「集客の技術」では「着地型」の集客方法が必要である。この着地型の集客方法には、旅行会社と連携して行う方法や、インターネットなどを使い現地から直接集客する方法、そして観光施設などと提携して行うような現地同士が連携し集客する方法などがある。

ここでは喜多方を事例として、それぞれの技術について具体的に考えていきたい。

5-2-1. 地域づくりの技術①地域づくり型観光事業者～喜多方の場合～

地域づくり型観光事業者とは、もちろん既存の観光事業者もそうであるが、新しい観光の場合、本来は観光用ではなかった地域資源を活用して観光を行うので、非観光部面から観光の効果を地域づくりに活かそうとする人たち⁴⁰のことも指す。つまり、地域づくり型観光事業者とは二つに大別すると、既存の観光事業者と非観光部門の観光に活かせる地域づくりを行う人ということになる。

喜多方の場合、旅館などの宿泊施設もそれ程多くなく、もともと観光事業者が多いとは言えない。しかし、喜多方市役所や、主に喜多方市の観光課の職員で形成されている喜多方観光協会は行政ではあるが、既存の観光事業者に区分することができる。喜多方市は、衰退していくまちの中で観光が活力になると思い、積極的に観光振興を行ってきた。例えば、旅行雑誌を買い取り、喜多方ラーメンの宣伝活動を行ったのは喜多方市である。その後、観光客が増加し、駐車場不足になった際には、新たな駐車場を新設している。また、蔵のまち並みを良くし、観光客が歩きやすいようにと街路の整備もなされた。そして現在では、観光協会を中心として、喜多方では1年を通じて多くの観光イベントが開催されている。この観光イベントの一つとして「きたかた喜楽里(きらり)博」というものがある。これは、秋に約2ヶ月間開催され、喜多方市全域でさまざまなイベントが開催されている。これは、観光イベントであると同時に、合併後の新喜多方市に一体感をもたせるという役目⁴¹も持っており、喜多方の観光は外向けのものだけではなく、新たな喜多方市を一つにす

⁴⁰ 『観光革命』P123

⁴¹ 喜多方市役所へのインタビュー調査時に、「喜多方の観光の目的」を尋ねたところ、「合併後のまちを一つにするという目的もある」との答えが返ってきた。

るという内向きのものとしても機能している。喜多方市の観光業者は多くはないと述べたが、彼らが活動的ではないということではない。観光イベントであるデスティネーションキャンペーンでは、「あいづDC喜多方推進委員会」の中に多くの観光事業者を含んでおり、「滞在時間の延長」という喜多方のテーマのアイデアを出したのも旅館の女将さんであった。また、私がお話を伺った女将さんが「あいづDCが自分を変えてくれて、いろいろな活動に積極的に参加するようになった」と言われていたことから分かるように、既存の観光事業者にとってあいづDCという存在は大きかったようである。

喜多方には、直接的な観光事業者が少ないせいか、本業は非観光部門でありながら、地域づくりを行う人がとても多い。そのような人の多くは、この地域で古くからの家業を営む旦那衆の人たちであり、彼らが観光まちづくりだけではなく、蔵保全のまちづくりなど、喜多方のまちづくりの中心を担っている。例えば、あいづDCの際に開催された「レトロ横丁」は、「あいづDC喜多方推進委員会」の中で、「喜多方には古いものがいっぱいあるんだから、それを活用すればいい」という一人の旦那さんのアイデアから、「とりあえずやってみよう」と始まった。そして、このレトロ横丁は、それ以降毎年開催され、今年で8回目を迎え、これからも続いていくと予定されている。このような「とりあえずやってみよう」という商人らしい柔軟な姿勢が、喜多方の観光に大きな影響を与えている。

このように、喜多方では行政、民間関係なく、商人たちの柔軟な土地柄を背景として、地域づくり型観光事業者たちが積極的に活動している。

5-2-2. 地域づくりの技術②地域連携の場づくり～喜多方の場合～

新しい観光を成立させる地域づくり型観光事業者には、既存の観光事業者と非観光部門のまちづくりを行う人たちがいると前の部分で述べた。これら他業種の人たちが新しい観光の概念を共有し、一緒になって活動していくためには連携の場が必要となってくる。

喜多方のまちづくりは2000年代に突入して活発になった。そのきっかけとなったのが、東京大学デザイン研究室である。喜多方に馴染みのある北沢教授を中心として、外側の視点から様々な取り組み・提案が行い、蔵のあるまちづくりを促進させた。喜多方のまちづくりに参加しておる人々が「喜多方のまちづくりの中で、東京大学デザイン研究室の存在は大きかった」⁴²と仰っているように、東京大学デザイン研究室喜多方チームの活動によって、市民に市民主導のまちづくりの意識が生まれた。その結果、小田付郷町衆会のように蔵を保全するための団体も誕生した。このような市民たちの民間団体が連携する契機となったのが、あいづDCである。観光キャンペーンの準備として、「あいづDC喜多方推進委員会」に市民団体のメンバーが集まり、議論し、情報を共有し、共に行動することで団体同士、市民同士の連携が深められていった。これは、その少し後に行われた元気再生事業にも言えることである。

つまり、東京大学デザイン研究室の参加によって、官民学の協働の場が設けられ、市民

⁴² インタビュー調査で多くの人が、「東京大学の北沢教授の影響は大きかった」と語った。

に市民主導のまちづくりの意識が芽生え、その後のあいづDCで、一つの観光キャンペーンに取り組むことで、市民の連携が深められた。また、それと時を同じくして実施された元気再生事業では、喜多方のまちづくりの成熟さも表れ始めたと同時に、地域の資源である蔵を人々に知ってもらい、活用し、見せることで、より多くの市民に喜多方のまちづくりを意識させるに至った。そしてこのことは、2006(平成18)年に合併した後の新喜多方市に住む市民の一体感を醸成することにもつながった。このように、2000年代のまちづくり運動を通じて、喜多方市民のヒューマンネットワークが構築されたことで、市民主体のまちづくりの動きが活発になった。そして、この市民活動の活発が地域の活性化を誘導していこうと考えられる。

5-2-3. 集客の技術～喜多方の場合～

「観光—地域づくり循環」を発生させるのに必要なもう一つの技術が「集客の技術」である。これまでの観光は大きな旅行会社が旅行商品を顧客に売ること、観光地に観光客を送客していたが、2章でも述べたように旅行会社は収益性の低い新しい観光に積極的に乗り出さないこと、そして少数の観光客を不定期に送客するビジネスモデルをもたないことから、その地域から発信し観光客を集める「着地型」の集客方法が新しい観光には求められている。この着地型の集客方法としては、旅行会社と連携して行う方法や、インターネットなどを使い現地から直接集客する方法、そして観光施設などと提携して行うような現地同士が連携し集客する方法などがある。

喜多方の観光客の集まり方を見てみると、ラーメンという強い観光資源があるために、旅行会社が企画したバスツアーで訪れる人も多く、いまだに既存の集客方法が有効的であるという面もある。また、喜多方ラーメンのおかげもあり、テレビや旅行雑誌などのメディアも集客に一役買っていると言える。さらに、JRから企画されたあいづデスティネーションキャンペーンのように交通からのアプローチも観光客が喜多方に足を運ぶきっかけとなっている。

このように既存の集客方法が依然として有効的に働いてはいるものの、喜多方に着地型の集客方法がないというわけではない。喜多方の着地型集客方法として大きな機能を有しているのは観光案内所である。喜多方の観光の特徴はいわば「まち歩きの観光」であり、観光客が知らない土地を歩くには観光案内所が大いに役に立つ。喜多方の中心地には駅前をはじめ、5か所観光案内所がある。観光案内所には「喜多方観光ぶらりんマップまちなかめぐり案内」という喜多方の観光マップの他に、4章でも紹介した老麺会の作成したラーメンマップも置かれている。観光案内所には観光協会の職員がおり、この人たちの中には観光コンシェルジュの資格を持っている人も多い。この観光コンシェルジュとは、2008(平成20)年度の元気再生事業の中で喜多方を「おもてなしのまち」として向上するために開始され、希望者は観光講座を受講し、認定試験を受けて観光コンシェルジュになることができる。私も喜多方を訪れた際に、この人たちにおすすめのラーメン店を尋ねて

いる観光客を見かけたが、観光コンシェルジュの方は自分の好みを押し付けるのではなく、観光客の好みを尋ねた上で、おすすめのラーメン店を紹介していた。

このように、喜多方では、既存の集客方法が依然として有効的ではあるものの、「まち歩き観光」の観光地として、観光案内所を中心に着地型の集客技術も持ち合わせている。

5-2-4. 「観光—地域づくり循環」の前提となる観光資源～ラーメンの役割～

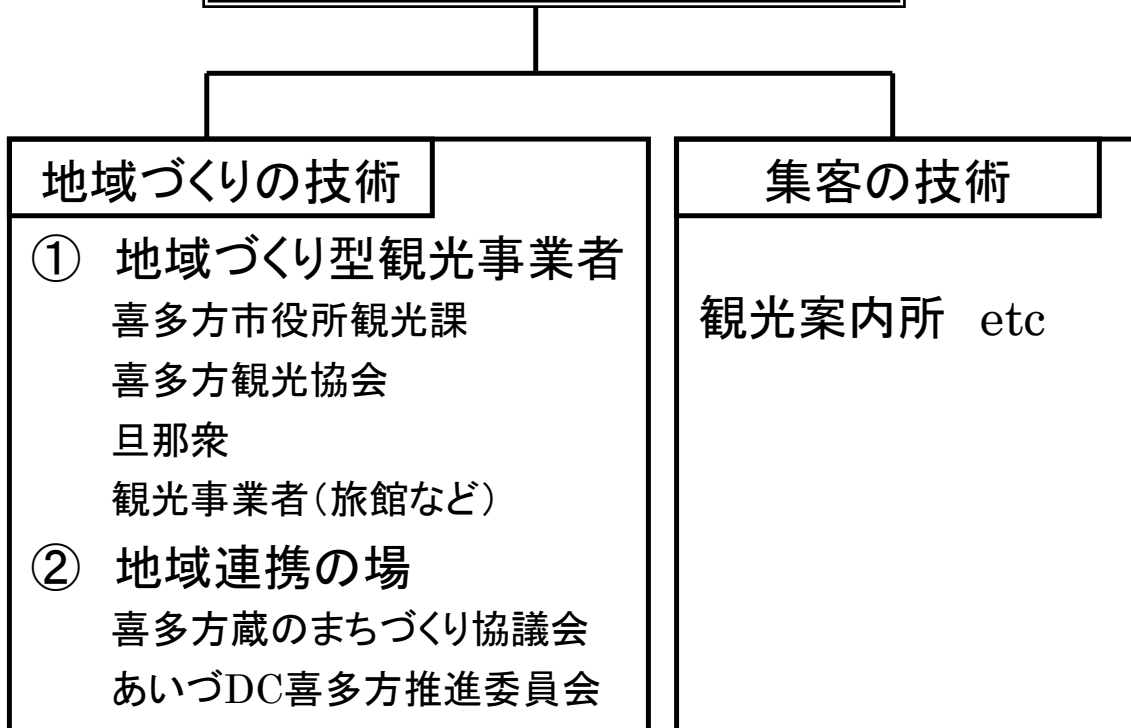
新しい観光は地域資源を観光資源に活用することが一つの前提となっている。人々が観光まちづくりによって、まちを活性化させようとしても、観光客にとって魅力的な観光資源がなければ、「観光—地域づくり循環」を回し始めることもできない。インタビュー調査時に「喜多方の観光の成功の要因は何であると思うか」という問いに対し、多くの人が「ラーメンだろう」と答えた。喜多方の観光資源であるラーメンは喜多方の観光にどのような影響をもたらしたのであろうか。日本交通公社の「観光客アンケート」⁴³によると、喜多方を初めて訪れたという観光客が36.5%であるのに対し、喜多方を2回以上訪れたという観光客は57.7%である。さらに、リピーター観光客の2割は、「10回以上訪れている」と回答している。つまり、喜多方は多くのリピーター観光客が訪れるまちなのだ。これには、喜多方ラーメンが多く影響していると考えられる。観光施設など「見る」ことを目的とする観光は、1回見てしまえば満足するので、観光客はもう一度訪れたいとなかなか思わないことが多い。しかし、食となれば、話が別である。その土地の名産はそこでしか食べることができない。また、安田亘宏『食旅と観光まちづくり』⁴⁴によると、46%の人が地域の「食」を目的とした国内観光に行ったことがあると答え、また、地域の「食」を目的とした国内旅行に行ってみたいと答えた人は77%にも上った。つまり、「食」は観光客にとって、旅の重要な要素の一つとなっているのだ。このことから、喜多方の観光においても、ラーメンの存在が大きいと言えるだろう。「蔵とラーメンのまち」と言われる喜多方ではあるが、ラーメンを目的とした観光客は多く、地元の人も「2割は蔵目的で、8割はラーメン」と認めるほどである。冬には、観光イベントとして「喜多方冬まつり」の中で、ラーメンフェスタが開かれている。滞在時間を長くするために観光PRが行われた喜多方ラーメンは、昭和60年代のグルメブームに乗って一躍有名になり、現在では、観光客が喜多方を訪れる目的となっており、喜多方の観光にとって重要なものとなっている。また、「喜多方ラーメン」という名前が、全国に喜多方の存在を知らせる大きな役割を果たしているとも言える。もし、喜多方ラーメンがなければ、観光客数が20年間100万人を超え続ける観光都市となっていなかったことは、おそらく間違いないだろう。

図15) 喜多方における「観光—地域づくり循環」の形成図(筆者作成)

⁴³ 新喜多方市観光戦略プロジェクト」より

⁴⁴ 安田亘宏『食旅と観光まちづくり』P22より

観光—地域づくり循環



6章：観光まちづくりを成功に導いた喜多方の土地柄

前章では積極的にまちづくりに励む人たちの存在が「観光一地域づくり循環」を支えていると述べたが、市民がまちづくりに関わる理由とは何なのだろうか。この章では、商人のまちという喜多方の土地の特性を踏まえ、喜多方の人々がまちづくりを行う基盤にある郷土愛について考えていく。

6-1. まちの規模

喜多方のまちの特性自体も、喜多方の観光成功に影響していると考えられる。喜多方の近くには鶴ヶ城などの観光資源を多く持ち、白虎隊などで良く知られ、全国的にも知名度の高い会津若松が存在する。会津若松～喜多方間は電車で20分の距離であり、観光客も気軽に周遊できる範囲である。また、会津には他にも磐梯山や猪苗代などの観光地もある。このように、喜多方周辺には多くの観光地があり、それが一つの観光圏となって人々をひきつけている。たしかに、喜多方は高速道路も新幹線も走っておらず、観光客が行きやすい場所だとは必ずしも言えない。しかし、このように周りに多くの観光地があることで、「会津若松に行くついでに喜多方にも行ってみよう」と観光客が思う程度には、喜多方に訪問することのハードルを下げていると考えられる。

また、東京から喜多方に行くと、まずフランチャイズ店の少なさに気付く。さすがに国道沿いは大手のスーパーチェーンなども存在するが、駅前やまちの中心部には牛丼屋などのファーストフードチェーンなどは皆無に等しい。これは、行政が地元の店舗を保護するための方針を取っているわけではなく、人口約5万人という規模から、フランチャイズ店が展開してこないというのがその理由である。しかし、このことが観光客が地元のラーメン店などの飲食店で昼食を食べるきっかけを生み出した。また、地元の店舗を守るという点からも、フランチャイズ店が進出してこなかったことは良かったと言える。

さらに、住民の人間関係からしても、まちが大きいために、この地域とあそこの地域の仲が悪いというような内部の亀裂も生まれにくかった。また、喜多方は商人のまちなので、まちづくりを積極的に行っている人の中にも、商売を営んでいる人が多いが、インタビューの中でも「商売をやっていると、どこかで(人間関係が)繋がっている」⁴⁵という話があり、人間関係が希薄でないことがわかる。このことから、「喜多方では、一人が何かすると言うと、すぐに人が集まって、行動にうつせる」⁴⁶という機動力があり、この地域の人間関係の基盤がまちづくりに大きく貢献していると言える。また、「小さなまちだから、何か行動を起こすと効果が表れるのがわかりやすく、それが達成感にもつながる」⁴⁷という発言から、まちの規模が大きいことが、住民にとってもプラスに働いていることがうかがえる。

⁴⁵ 喜多方でのインタビュー調査より

⁴⁶ 同上

⁴⁷ 同上

6-2. 商人のまち・喜多方

旦那衆たちへのインタビューを通じて、このまちの商人としての土地柄が、彼らの考え方に環境として多くの影響を与えていることがわかった。

「本業があるにも関わらず、なぜまちづくりをするのか」という質問に対して、全員が「自分の商売だけが上手くいけばいいという我田引水なやり方ではだめだ」と答えた。彼らの先祖の多くは、江戸時代から商人や地主として活躍していた。そしてその後、明治維新など大きな時代の変化の中で、柔軟に商売を変えながら⁴⁸、強かに商売を行ってきた。そんなに熱心に商売を行う人たちが「自分の商売だけが良ければいいわけではない」と考えているとは、とても興味深いことである。実は、このような彼らの考え方の背景には、喜多方の思想と商人たちの歴史がある。喜多方には、昔から陽明学・北方藤樹学が浸透していた。近くに位置する武士のまちである会津若松では、君臣関係の規律を守ることを中心とする朱子学が好まれていた一方で、商人のまちである喜多方では実践的な藤樹学が浸透し、喜多方の藤樹学は、北方藤樹学と呼ばれている。藤樹学とは、江戸時代の近江出身の陽明学者である中江藤樹から生まれたもので、朱子学に対し実践的なものであったため、商人のまちである喜多方に浸透した。また、このような商人思想をよく表す出来事が明治時代に喜多方で起こっている。それが明治時代の鉄道敷設である。明治時代の喜多方の商人たちは、新時代の流れに乗って豊かであった。そしてその頃、郡山で鉄道の敷設工事が開始され、1889(明治32)年には会津若松まで鉄道が開通した。しかし、資金不足から路線が変更されることになり、喜多方に鉄道が通らない計画が出された。そこで、喜多方に鉄道を開通させるため、喜多方の商人が工事費を負担すると言い、その結果、喜多方駅が開業し、喜多方に鉄道が開通したのだ。このように喜多方では、行政が変わって商人がインフラを担っていたのである。つまり、このような思想や歴史が、現在の社会貢献的思考を持つ喜多方の商人を生みだしていると言える。また、このような背景が彼らの喜多方の商人としての誇りの源泉となっている。

また、喜多方には、会津喜多方青年会議所(JC)があり、インタビューした旦那衆の全員が若い頃、この団体に所属していたという。青年会議所では、「人づくり」と「地域づくり」を中心に、地域を活性化させるイベントや、まちづくりや地域に関する勉強会などが行われている。青年会議所に所属していた人は、「人として鍛えられる」⁴⁹と語っており、この団体に所属したことで、発言力や行動力が鍛えられたと言う。たしかに、青年会議所の活動がすべてまちづくりに繋がっているとまでは言えないが、ここに所属した人たちの多くが現在もまちづくりに参加しているというつながりは看過できない。また、この場で作られる人脈は縦にも横にも広がるものであり、地域の結びつきを強めている。さらに、この団体が連綿と続き、現在も喜多方の若い将来の旦那さんたちが所属していることを考

⁴⁸ インタビューしたある味噌・醤油屋の旦那さんの家は、江戸時代から続けて醸造業を営むかたわら、不動産業やビールの卸業を営んでいた時代もあったと言う。

⁴⁹ インタビューをさせていただいた方の何人かは、このように言われていた。

えると、地域のまちづくりに若手を輩出し続ける機関として、青年会議所は重要な役割を担っていると言えるだろう。

6-3. まちづくりにつながる郷土愛

喜多方のまちづくりの中心には、古くからの家業を営む旦那衆と呼ばれる人たちの存在があるということは、前章でも述べた。彼らの多くは経営者であり多忙な日々を行っているにも関わらず、まちづくりに積極的に参加している。そんな彼らに「本業があるのに、なぜそこまで熱心にまちづくりを行っているのか」という質問をしてみたところ、様々な答えが返っていたが、すべての人の答えの根底にあったのは、「このまち(もしくはこのまちの人)が好き」という郷土愛であった。この郷土愛について尋ねてみると、大きく二つの答えが返ってきた。一つは、「自然発生的」に生まれるものというものであり、もう一つは、「知る」ことによって得られたというものだ。

私がインタビューした旦那衆の方たちは、江戸時代からの家業を継いでいる人が多く、先祖は江戸時代から喜多方の地に住んでいるという人が多い。つまり彼らにとって喜多方とは古くから自分の家族が住んでいる土地であり、血縁・地縁を同時に感じる場所なのである。また、喜多方には、山や川などの自然があり、きれいな水やラーメンなどのおいしい食べ物があり、その他にも文化や歴史、蔵、四季など多くの魅力がある。喜多方には高等教育機関がないので、多くの人が学生時代を外の世界で過ごし、またその後、都市部で働く人もいる。外の世界で過ごすことで、初めて内の世界の魅力に気付いたという方が旦那衆の中にも多くいた。このように自分の生い立ちや経験から、彼らの中で郷土愛は自然と醸成されていったのである。

また、喜多方には奥深い歴史・文化が存在する。それらを知ることによって、郷土愛が形成されたと答えた人もいた。どこのまちもそうであるが、喜多方にも歴史があり、また、商人のまちであったことから、昔から市民の活動が活発であったという背景がある。このような歴史を知ることによって、自分のまちを誇り、そして郷土愛を持ったと彼らは語った。それは、学校で教えられるという形のものだけでなく、彼らの家族はずっとその土地で生きているので、家族からそのような話を聞いてきたという人もいれば、青年会議所の活動でまちについてよく知ることができたという人もいる。

つまり、喜多方の人たちは、豊かな自然・文化の中で、それぞれの経験をもとにした郷土愛を持っており、その郷土愛がまちづくりの出発点となっている。

7章：観光まちづくりが地域に与える影響

7章では、喜多方の事例から、観光まちづくりが地域社会に与える影響について考察する。その上で、喜多方の事例を踏まえ、観光まちづくりの地域社会における効果について考える。

7-1. 喜多方における観光まちづくりの意義

観光が地域に及ぼす影響は大きく「経済的な影響」「地域社会への影響」「地域環境に与える影響」の三つに分けられるという⁵⁰。たしかに、喜多方では観光の経済効果は市内総生産の約1割程度⁵¹になっていると考えられ、衰退していく地方としては、その経済効果を看過することはできない。しかし、直接的に観光業で生活を営む人が多くないことから考えると、市民にとってそのような経済効果だけが観光まちづくりへのモチベーションになっているとは考えにくい。そこで、ここでは喜多方の観光まちづくりが地域社会に与える影響について考えていきたい。

インタビュー調査から、喜多方のまちづくりに積極的に参加する人たちの基盤には、共通して「郷土愛」というものがあることを前章で述べた。これは観光まちづくりのモチベーションになっているだけではなく、蔵保全の活動の根底にもなっていると考えられる。そして、これらの活動のもう一つの基盤として存在しているのが、「社会貢献的な商人の気質」である。この二つの性格を持ち合わせている住民がいたからこそ、喜多方ではまちづくりが盛んに行われているのである。

しかし、背景にこのようなまちの性格があるだけでは、まちづくりが積極的に動かされるわけではない。そこできっかけとなったのが、5章で述べた東大研究室やあいづデザインーションキャンペーン、そして蔵のまちづくり再生事業である。北沢教授率いる東大チームは「よそ者」としての視点から、喜多方に対して多くの提案をし、これにより喜多方の人々のまちづくりに対する気運が高まった。そして、そのように人々の気運が高まっている中であいづDCが行われた結果、まちづくりに参加する人々の連携は広がり、そして深まっていった。また、その後行われた喜多方の元気再生事業は、喜多方のまちづくりの成熟を象徴するプロジェクトとなったと言える。つまり、喜多方では「郷土愛」と「社会貢献的な商人気質」を基盤として、2000年代のまちづくり活動を通じて、人々の連携は広がり、深まっていった。その結果、現在、多くの人々が協力して、蔵のまちづくり・観光まちづくりを行っているのである。

特に、1年を通してイベントを開催している観光まちづくりは、絶え間なく観光イベントが行われることによって、それを企画・準備する場が常に持ち続けられる状態を生む。つまり、このサイクルがつながり続けるということは活動の持続可能性が生まれることを

⁵⁰ 『観光革命』P83より

⁵¹ 福島県の経済効果に関するレポートをもとに、喜多方の観光客数を当てはめ、およその観光客がもたらす金額を計算し、それを対喜多方市の市内総生産で筆者が出した値。

意味する。また同時に、今年で4回目をむかえる「きたかた喜楽里博」からは、合併後の新喜多方市に一体感を持たせるという効果も有している。さらに、このような観光や蔵保全に関するまちづくりを語らう場で、人々は喜多方の将来についても語り合うことができている。実際、喜多方では、現在地域にある水力発電を地域のものにしようとする電力構想の話が進展している。要するに、まちづくりに関する会議の場は、地元の人々の親睦を深める場(プラットフォーム)となっているのだ。

これで、観光事業者が少ないにも関わらず、観光まちづくりを積極的に展開している理由がわかる。喜多方において観光とは「目的」ではなく、「手段」に他ならないのである。これは、2章で述べた新しい観光の考え方である『地域づくりのための観光』と同じことだ。喜多方の人々は、観光を「手段」とし、電力構想や雇用拡大などの地域の活性化を本来の「目的」としているのだ。つまり、観光は、地元を愛する人々を集め、新たなアイデアを生み出す機会を喜多方に与えているに過ぎない。

昨年の東日本大震災以来、喜多方の観光客数は減少している。それ以降観光客は減少しており、それは喜多方にとって大きな問題である。しかし、危機は好機と表裏一体である。このような逆境にこそ、人々は集い、課題に向けて新たな行動を模索し続ける。そして、喜多方には地元を思い、人々が集まり行動する姿勢が根付いている。だから、きっと今回の困難の先にも新たな成功をつかみ取ることだろう。

7-2. 観光まちづくりが地域社会に与える影響

喜多方の事例からわかるように、観光まちづくりが地域にもたらす効果とは、多様な人々の中のネットワークを繋げ、広め、深め、そうすることで地域の将来について人々が語らう場(プラットフォーム)を作り出すことである。大澤も観光まちづくりが地域社会に与える影響について「これまでご縁がなかった人々が共通の価値観で集まれる場所が創り出される。また、地域に同じような試みをしている人が点在する場合にも、そうした人々をネットワーク化することができる。実は、この「新しいネットワークづくり」こそが、ニューツーリズムが地域社会にもたらす最大の効果である」⁵²と述べている。そして、喜多方の電力構想のように、雇用の拡大や地域に眠る他の資源の活用などの地域活性に関するネタが、このような場(プラットフォーム)から生まれてくる。これについても「地域活性化のために最も大事なものは「新しい試み」を生み出すためのやる気であり、観光への取り組みはこうした取り組みをしやすい」⁵³と言われており、また、このように「地道な取組によって地域の魅力を充実させていくことが、観光地の魅力を高め、直接的収益の何倍もの効果をもたらす」⁵⁴とも言われている。これらの言葉から考えても、観光まちづくりには地域活性化を促進する効果があると言えるだろう。

⁵² 『観光革命』 P95

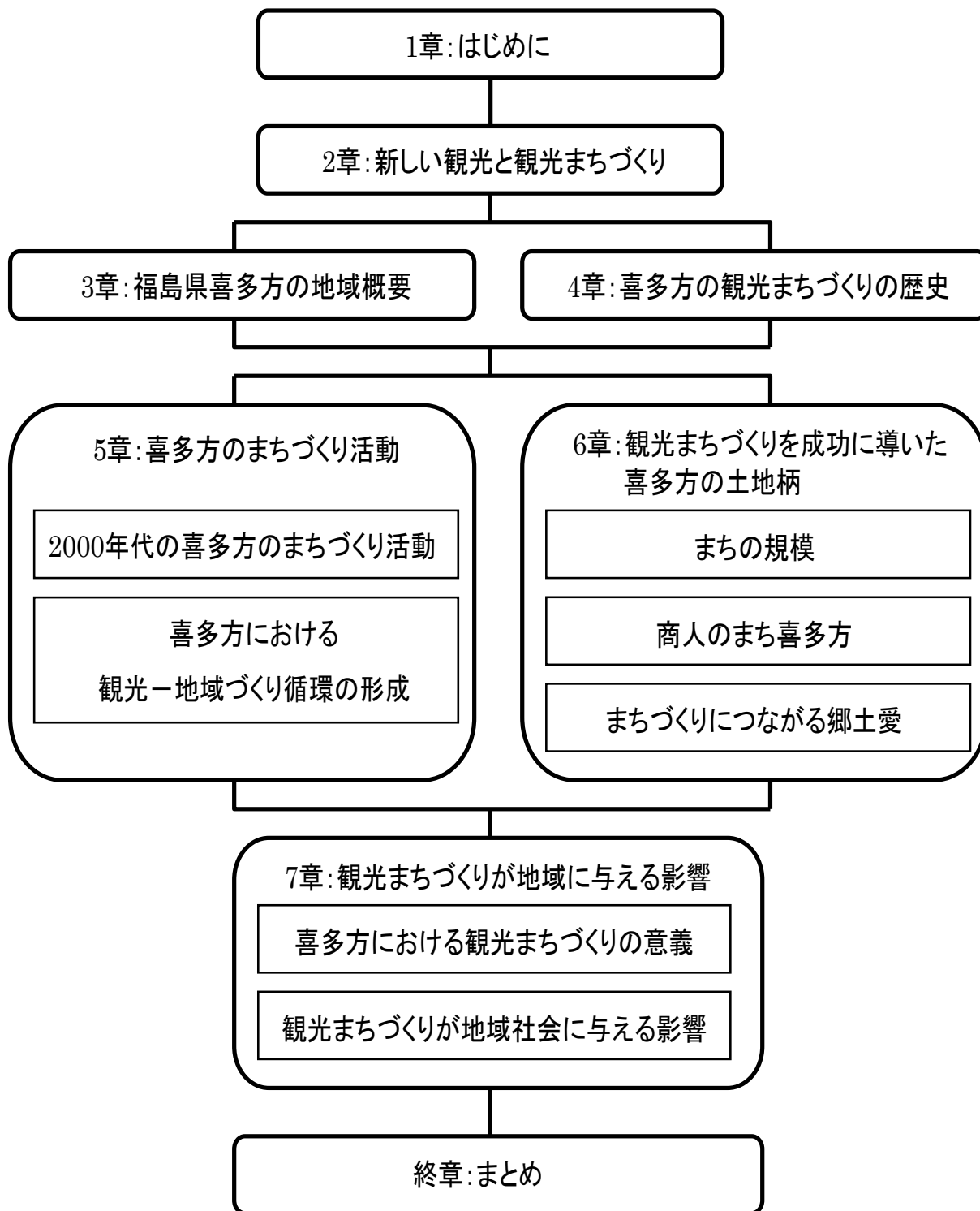
⁵³ 同上 P96

⁵⁴ 同上 P102

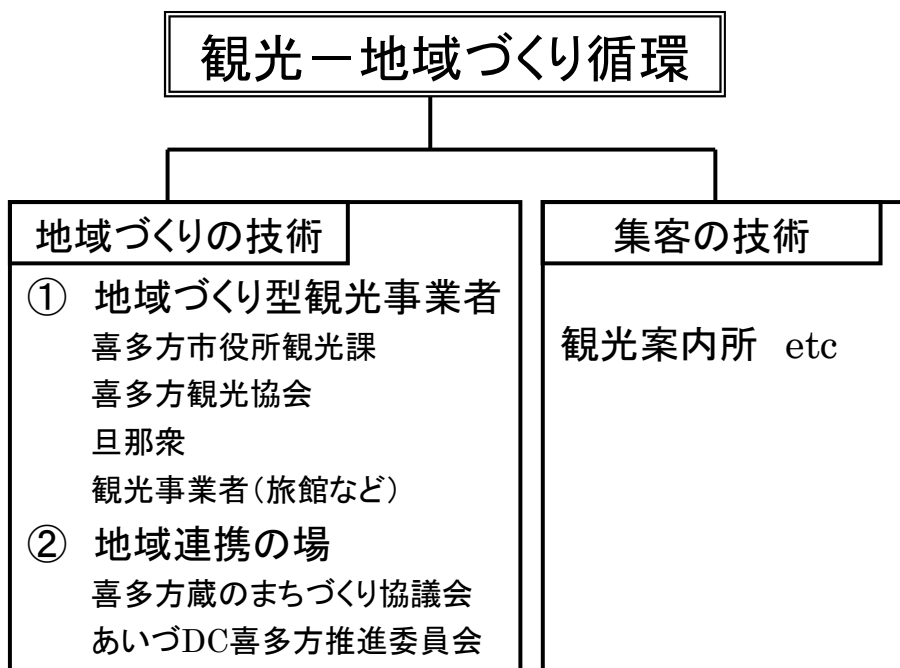
終章：まとめ

8-1. 論文の構成

以下は、本論文のフロー図である。



喜多方の「観光—地域づくり循環」の形成図(5章より)



8-2. 本論文の意義

喜多方の観光は、目的ではなく人と人をつなぐツールとして働いている。このことから、地方における観光まちづくりの意義とは、観光まちづくりに取り組むことによって、人々の連携を深め、人々が語り合い、まちづくりを行うプラットフォームを作ることがわかった。

また、喜多方には、知れば見せたいと思うほどの歴史や地域資源があり、そのような魅力的な土地がそこに住む人々に郷土愛をもたらしていた。そして、自分のまちが魅力的であるからこそ自分の地域を知ってもらいたいと外に発信したくなるのだ。しかし、これは喜多方だけに言えることではない。今は衰退している他の地方の中心市街地だって、以前は多くの人が住み、栄えていたことを考えると、それなりの誇れる歴史を持っているはずだ。つまり、観光まちづくりには、自分の地域をよく知り、「観光—地域づくり循環」を正しく行うことが重要なのである。

8-3. 謝辞

まず、熱心に指導していただいた指導教授である浦野先生にお礼を申し上げます。また、中間報告などの際に、多くのアドバイスをくださった元同期、現同期、後輩のみなさん、ありがとうございました。そして、最後になりますが、インタビュー調査を受けてくださった喜多方のみなさん、本当にありがとうございました。最初はこんなに多くの方にお話を聞くことはできないと思っていましたが、皆様のご厚意で本当に多くの方に貴重なお時間をいただき、お話をさせていただくことができました。重ねてお礼申し上げます。

【参考資料】

- ・大沢健『観光革命 体験型・まちづくり・着地型の視点』角川学芸出版、2010年
- ・総合観光学会 編『観光まちづくりと地域資源活用』同文館出版、2010年
- ・西村幸夫 編『観光まちづくり まち自慢からはじまる地域マネジメント』学芸出版社、2009年
- ・木村尚三郎「21世紀は観光の時代」『グローバル観光戦略』日本都市センター、2005年
- ・溝尾良隆『観光まちづくり 現場からの報告』原書房、2007年
- ・石原武政・西村幸夫 編『まちづくりを学ぶ 地域再生の見取り図』有斐閣、2010年
- ・安田亘宏『食旅と観光まちづくり』学芸出版、2010年
- ・鈴木茂・奥村武久 編『「観光立国」と地域観光政策』晃洋書房、2007年
- ・(社)日本観光協会全国産業観光推進協議会 編『産業観光100選 産業観光ハンドブック』交通新聞社、2008年
- ・油川洋・三橋勇 他『新しい視点の観光戦略—地域総合力としての観光—』学文社、2009年
- ・喜多方市史編纂委員会 編『喜多方市史第三巻』福島県喜多方市、2002年
- ・喜多方市史編纂委員会 編『図説 喜多方市の歴史』福島県喜多方市、2004年
- ・野原卓「喜多方における実践都市デザイン」『季刊まちづくり 27号』2010年

- ・喜多方市『喜多方市総合計画』2007年
- ・喜多方市『喜多方市総合計画基本計画<中間年次見直し>』2012年
- ・喜多方市『資料視察』2012年
- ・NPO法人まちづくり喜多方『喜多方の元気再生ダイジェストぶっく』2009年
- ・喜多方観光協会『福島県あいづデスティネーションキャンペーン後の喜多方』2005年
- ・喜多方観光協会『2006 夏 福島県あいづデスティネーションキャンペーン後の喜多方』2006年
- ・喜多方観光協会『2007 夏 福島県あいづデスティネーションキャンペーン後の喜多方～3年目の正直～』2007年
- ・喜多方市『まちづくり談話会 喜多方市のまちづくり奮闘記』2009年
- ・NPO法人まちづくり喜多方『未来に向けての喜多方のまちづくり』2012年
- ・東京大学都市デザイン研究室有志「2002年度地域づくりサポート事業実施報告者」2003年
- ・東京大学大学院都市デザイン研究室『喜多方のまちづくり』2004年
- ・福島県『アナリーゼ福島No18 県内での旅行・観光消費がもたらす経済効果』2009年
- ・国土交通省『平成20年度地方の元気再生事業の事業実施調書』2009年
- ・国土交通省『平成21年度地方の元気再生事業実施調書』2010年
- ・福島県『福島県の推計人口平成23年度版』2012年

- ・ 福島県『福島県観光客入込状況 平成 22 年分』2011 年
- ・ 喜多方市『新喜多方市観光戦略プロジェクト』

- ・ 喜多方市HP <http://www.city.kitakata.fukushima.jp/> (2012 年 11 月 20 日閲覧)
- ・ 喜多方市観光協会HP <http://www.kitakata-kanko.jp/> (2012 年 11 月 20 日閲覧)
- ・ 蔵の会HP <http://www.yaumon.co.jp/kuranokai/index.html> (2012 年 10 月 24 日閲覧)
- ・ 会津北方小田付郷町衆会HP <http://odaduki.com/2maime.html> (2012 年 11 月 21 日閲覧)
- ・ 喜多方まちづくりセンターHP <http://kitakata-machi.com/> (2012 年 10 月 30 日閲覧)
- ・ 福島県HP『福島県市町村要覧』2012 年 <http://www.fksm.jp/youran/072087.html>
- ・ 内閣府HP「地域活性化ニュース 日本一の蔵再生によるまちおこし～福島県喜多方市」
2010 年 http://www.chiiki-info.go.jp/backnumber/local/detail/101112_3.html
- ・ 愛知淑徳大学谷沢明研究室『町並み紀行：まちづくり取材【喜多方】いっちょ前の男なら蔵の一つも建てねば』2006 年 <http://www2.aasa.ac.jp/people/kanare/1601.htm>
- ・ 『蔵のまち 喜多方の景観』2007 年
http://wwwcms.pref.fukushima.jp/download/1/keikan-kei09_p02-03.pdf

- ・ 大野友平ほか『喜多方における地域資源を活かしたまちづくりの実践 その1～まちづくりの現況と課題』2004 年
- ・ 戸田惣一郎ほか『喜多方における地域資源を活かしたまちづくりの実践 その4～空蔵システムの実践』2005 年
- ・ 永瀬節治ほか『民間学の連携による地方都市中心市街地の将来ビジョン形成に関する研究』2006 年
- ・ 濱田恵三『地域ブランドによる観光まちづくりの一考察』2010 年
- ・ 小林充・川崎興太『喜多方市における「蔵を活かしたまちづくり」に関する研究～メインストリート沿道の蔵所有者へのアンケート調査の結果を踏まえた現状と課題の分析～』2012 年